

学内広報

for communication across the UT



特集：高校生のためのオープンキャンパス2008開催
東京大学の国際化に関する意見と要望調査

2008.8.21

No. 1376

オープンキャンパスとは？

高校生・受験生に大学を公開し、施設見学、研究内容紹介、模擬講義、学生との懇談などを通して、本学への理解をより深めてもらおうというイベントです。多くの他大学でも行われており、本学では2000年度より開催されています。

東大の夏は、やっぱりオープンキャンパス

今年も7月31日(本郷地区)・8月1日(駒場地区)と2日間にわたって『高校生のためのオープンキャンパス』が開催されました。本郷地区では、安田講堂前・社会科学研究所前・農学部3号館前の3箇所に総合受付を設置。朝から多くの高校生が詰めかけましたが、総合受付後、参加者は期待あふれる表情で目当ての部局へ次々と向かっていきました。今回の特集では、熱気のこもった2日間の模様をご紹介します。

7月31日(木)本郷地区キャンパス



本郷地区プログラム紹介

<p>法学部</p> <p>『法』と『政治』を舞台とした知の躍動: 君も体験しよう、法学部スタッフが誘う意外に身近な世界。 【模擬講義、文献類展示、助教・学生等による質問コーナー】</p>	<p>医学部</p> <p>生命科学の核、それは人間をみる医学です。 【模擬講義、医学図書館見学など】</p>
<p>工学部</p> <p>基礎からフロンティアまで: これからの社会と環境に責任を持つ工学部へようこそ! 【講義、学科・研究室見学、学生だんわ室での交流など】</p>	<p>文学部</p> <p>古今東西、人間ほど不可思議なものはなかった。 文学部の人と言葉にふれて、自分を探し出してみよう。 【模擬講義、研究室見学ツアー、教員著書展示、質問コーナーなど】</p>
<p>理学部</p> <p>解かれていない謎がある! 先輩たちが理学の魅力を全部見せます! 【講演、実験の実演、現役学生による講演会、進学相談、女子高生のための相談コーナーなど】</p>	<p>農学部</p> <p>生きものと生きものが生みだす 科学の最先端をお見せします! 【模擬授業、研究室見学など】</p>
<p>経済学部</p> <p>「経済学」は社会現象を読み解く手法です。 【模擬講義、施設見学など】</p>	<p>教育学部</p> <p>皆さんの先輩達が質問に答えますので、何でも聞いてみましょう! 【模擬講義、学部生によるガイダンスなど】</p>
<p>薬学部</p> <p>幅広いライフサイエンス研究の 最先端の雰囲気を感じます。 【研究室見学、3年生による進学相談など】</p>	<p>大学院情報学環</p> <p>「知」の“越境”と“融合”の森 大学院情報学環・学際情報学府の紹介 【パネル展示等による研究科・研究室紹介、学環制作展の紹介など】</p>

その他のイベント

<p>キャンパスツアー【1時間コースを実施】</p> 	<p>現役東大生による東大ガイダンス</p> <p>【東大生によるプレゼンテーション、東大生とフリートークなど】</p> 
<p>研究所等施設見学</p> <p>地震研究所 【展示・実験自由見学、施設見学ツアーなど】 分子細胞生物学研究所【講演など】 総合図書館【見学】 総合研究博物館【見学】 史料編集所【見学】</p>	<p>女子学生コース</p>  <p>【卒業生講演、現役女子学生によるパネルディスカッション、交流会など】</p>

見学コース例

素粒子体験コーナー(理学部)



宇宙から飛んでくる素粒子などを測定器で観測し、実際の素粒子実験の雰囲気味わうコース。初めて見る素粒子測定に機器に高校生たちは興味津々でした。

サイボーグ技術について学ぼう！ (工学部)



生体信号計測と情報処理技術からプレインマシンインターフェイスを学ぶ企画。ヒトの筋肉を研究してサイボーグ技術に生かしているのです。

半導体中にする量子力学の世界 (理学部)



2種類の半導体の界面に閉じ込められた「2次元電子」が示す量子現象を解説。デモ実験もやっていました。写真は冷やした金属板と金属球のデモ実験。

自律移動ロボットの行動制御 (工学部)



見ているだけで楽しいロボット実験。2台のロボット(写真)がぐるぐると床を走りまわっていました。高校生、大喜びです。

太陽光で 水から水素を作る (工学部)



水中の光触媒に光を当てて水素を作る実験。青いパッドの水の中に、ホースの先からぷくぷくと水素が出てきます。

こんな高校生が参加していました！



石川県立金沢錦丘高校の2年生トリオ。経済学部、文学部を見学してきたそうです。



滋賀県立彦根東高校の1年生5人組。午前中は工学部でロボット技術を見学し、午後は地震研へ。全員理系志望らしいです。女性研究者(の卵)を目指す！？



当日朝、宮崎から飛行機でやってきたという男子3人。宮崎県立西高校1年生。午後から法学部と農学部を見学する予定だとのことでした。



福井県立若狭高校1年生。工学部と教育学部を見学後、サンドイッチをほおぼって腹ごしらえ。

8月1日(金)駒場 地区キャンパス

8月1日には駒場地区でオープンキャンパスが開催されました。

駒場地区のオープンキャンパスは、教養学部・総合文化研究科を中心に、数理科学研究科、生産技術研究所(生産研)と先端科学技術研究センター(先端研)の4部局で企画されました。HPからの事前登録では、申込み開始後2日間で受入定員をオーバーしてしまい、登録申込を早々に締め切らなければならないほどの人気でした。当日は、天気にも恵まれ、最終参加者総数は過去最高の2,133名を記録しました。駒場地区総合受付が設置された駒場1キャンパス正門には、午前8時の段階ですで行列が出来ており、9時の時点では坂下門近くまで参加者の列が伸びたため、9時30分の受付開始を前倒して、9時10分に受付をスタートさせました。午前中は、教養学部の3つの大教室を使って主企画のキャンパス紹介、教員との談話会が並行して行われ、午前中の最後に、総合文化研究科教員による2つの総合講演が実施されました(理系、文系の話題1つずつ)。

また、コミュニケーションプラザ2階(生協購買部の上階)において、父母・引率者を対象としたキャンパス紹介も行われました。参加者の中には、非常に遠方(九州、沖縄)から来られた方も含まれており、関心の高さがうかがわれました。約1時間の昼休みのあと、午後の部では、数理科学研究科、生産研、先端研での模擬講義や研究所見学など、実施企画の数も増え、どれも大変好評でした。最も多くの学生を受け入れた教養学部・総合文化研究科でも、午後は7つの模擬講義(文系3コマ、理系3コマ、文理融合系1コマ)と4つの実験デモ(物理実験、化学実験、生物実験、認知科学実験)が開講され、多くの高校生が模擬講義や実験デモに目を輝かせていました。午前、午後を通じて、KALS(駒場アクティブラーニングスタジオ)、NEDOギャラリー、そして、駒場博物館、駒場図書館、情報教育棟の各施設における施設見学、ガイドツアー、特別企画等が並行して実施され、各施設ともにたくさんの高校生でにぎわっていました。特に、現役東大生の先輩たちとの質問コーナーにおいて、終了時間近くになっても受験勉強やキャンパス生活の詳細について、高校生が先輩たちと話し込んでいた姿が非常に印象的でした。



質問コーナー&教員著書展示(文学部)



ずらりと並んだ教員著書。その向こうでは学生たちが高校生の質問に答えていました。

学環制作展『iii Exhibition』紹介 (大学院情報学環)



情報学環・福武ホールの一室で繰り広げられていた映像インスタレーション。本学では数少ない、アーティストックな雰囲気での展示でした。



座って休んでいた福岡県立筑紫丘高校2年生。ひとりで来たのかと思いきや、高校でツアーを組み、総勢120人で参加したとのこと。「図書館を見学しました。とても面白かったです」とうれしそうでした。



群馬県立前橋高校1年生。理学部、工学部、法学部を見学。「工学部の『神経インターフェイス』! すごく面白かった!」とのこと。遠くからやってくる参加者も多いオープンキャンパスでは、前橋は近所に思えてきます。

無事終了!

本郷地区参加者は約7000人、駒場地区参加者は約2100人。今年もたくさんの高校生たちがオープンキャンパスに来てくれました。皆様、ご協力ありがとうございました!

東京大学の国際化に関する意見と要望調査

— 教職員・学生一人一人の声を反映させた国際化推進長期構想の立案に向けて —
 (Ⅰ. 教員向けおよびⅡ. 職員向け 調査結果ダイジェスト)



国際担当理事・副学長
浅島誠

【回答者数】

- ・教員: 833名
- ・職員: 835名

国際連携本部国際企画部は2009年度に東京大学の「国際化推進長期構想」を策定するために、昨年度後半から東京大学の国際化に関する学内調査を実施しており、今回はその調査の集大成として、**東京大学の国際化の方向性や重点施策について**教職員や学生の皆さま一人一人にご意見・ご要望を伺いました。

本学の国際化について、**大学の構成員一人一人の皆さまにご意見や要望を直接お尋ねするのはこれが初めて**ですが、大変積極的にご回答いただきましたこと、ここに篤く御礼を申し上げます。教員からは833名、職員からは835名から回答を得ました。これは常勤の教職員についていうと、**約6-7人に1人が回答**をしてくれたことを意味します。

このたびは、Ⅰ. 教員向け、および、Ⅱ. 職員向けの調査結果をダイジェストで紹介します。**調査結果の詳細は、国際連携本部ホームページをご参照**ください。また、学生向け（留学生含む）および本学の外国出身の教員および研究者を対象とした調査については、次号、次々号にて結果を紹介していきたいと思ます。

なお、調査結果は年末に「東京大学国際化白書（仮称）」としてとりまとめられ、2009年度に策定される「東京大学国際化推進長期構想」の参考に供される予定です。**来年度策定する「東京大学国際化推進長期構想」では、皆さんの意見を積極的に取り入れていく所存です。その節は何卒ご協力いただきたく、どうぞよろしくお願い申し上げます。**

教員の声

Ⅰ. 教育の国際化

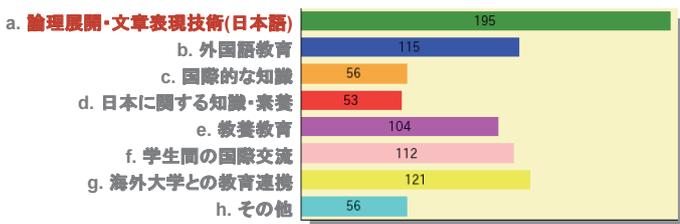
- I-A. 本学の学生への教育のあり方
- I-B. 東京大学における外国語教育
- I-C. 英語教育
- I-D. 学生の国際交流・教育連携
- I-E. 留学生の受入れ

Ⅱ. 研究の国際化

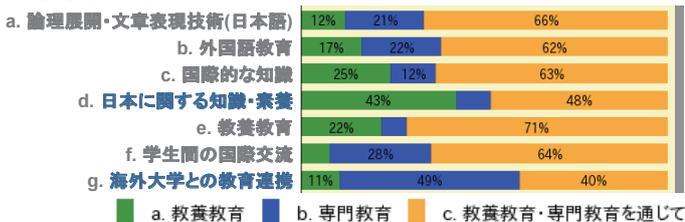
- II-A. 研究成果の発信
- II-B. 研究の評価
- III. 国際活動の支援体制
- IV. 「東京大学の国際化」に対する意見

本学の学生への教育のあり方

●本学の学生が卒業後に国際的に活躍するために、東京大学はどのような教育を充実させる必要があるとお考えですか？



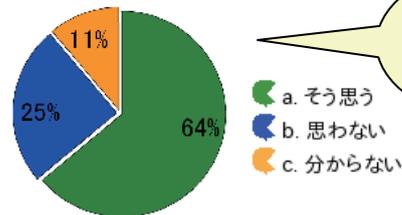
●それは、教養教育／専門教育のいずれを中心に充実するとよいとお考えですか？



1) 「教養教育」は教養&専門教育を通じて、2) 「海外大学との教育連携」は専門教育で、3) 「日本に関する知識・素養」は教養教育で！

学生交流・教育連携

●海外大学との学生交流や教育連携などの機会を、現在の教育を一部圧縮してでも、東京大学の学生に与えた方がよいと思いますか？



現在の教育の一部を圧縮してでも、学生に学生交流の機会を与えた方がいいとのこと意見です。

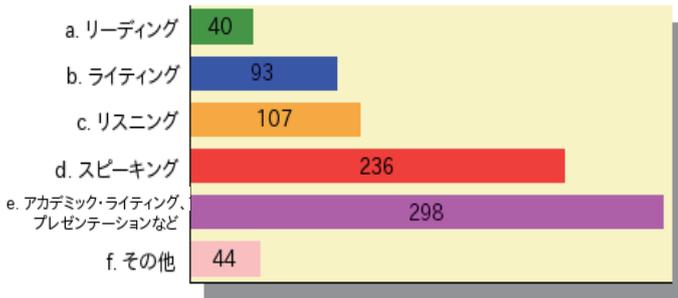
【学生交流・教育連携に関するコメントから】

・「モチベーション（動機）のない学生に海外留学の機会を与えても無駄」との声が目立ちました。「積極的に国際会議等に学生を派遣してきたが、経費に見合うだけの結果が得られないと感じることが多くなった。」との声も。

・「教育に対する基本的な理念とそれを実現するための全体プランのなかで行わなければ、戦略的に危うい印象を免れない」。単なる海外旅行に終わらないように、(一律の海外派遣ではなく)必要な学生が必要な時に行ける柔軟な制度設計を求める声が複数ありました。

英語教育

●学生の英語運用能力に関して、どの側面を最も強化する必要がありますとお感じですか？（質問11）

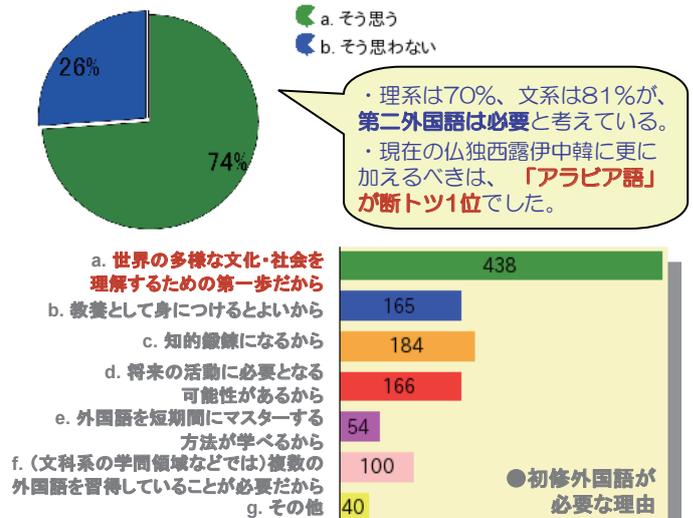


【英語教育に関するコメントから】

- ・「実践の場」、「日常的に使う環境」が大事とのコメントが多くみられました。「教室での訓練は、量の上の水練で、それはもう十分。ともかく水に放り込み、泳がざるをえなくしてやるのが一番。」とのコメントもありました。
- ・「会話力」が大事という声と、大学で教えるべきは「読解・文章表現」との意見の両方が見られました。「**学問とは別の軸である『スキル』を軽視することがないように気をつける必要がある。**」との意見も頂きました。
- ・学生の英語レベルや向上心の差が大きく、同じ講義室で教育することの限界を指摘する声も多くありました。
- ・英語による講義は学生の居眠りを招く、との指摘も複数ありました。
- ・「国際化＝語学（英語）力ではない」「この質問自体、低レベルすぎる」といった批判も複数いただきました。

多言語教育

●現在、東京大学では学部1-2年生に初修外国語(英語以外)の履修を必修としています。これらは必要だと思いますか？



【多言語教育に関するコメントから】

- ・「外国語習得は集中的に行うべきで、週1・2回では忘れるためにやっているようなもの」と、外国語教育をするなら、**質・量の充実を求める声**が多数ありました。
- ・一方で、「意思疎通は英語で十分なので、必修とするならば、一度に**10カ国語程度を学べるよう**にすべき。まずは挨拶と簡単な読み書きを代表的な言語について学ぶべき。」と広く浅くの声も複数ありました。
- ・「**英語で十分**」との声も多数ありました。

何学年で、どういう体制で？

●質問11で選択した内容の英語教育を現在のカリキュラムに追加するとしたら、どの教育段階がよいと思いますか？



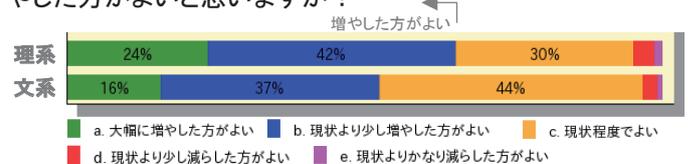
●東京大学で学生の海外派遣を進める場合、どの教育段階を中心に進めるとよいとお考えですか？



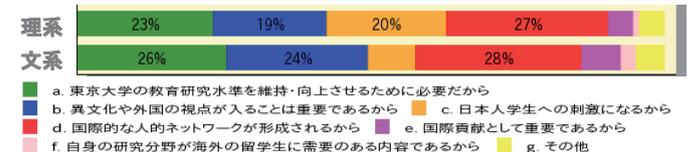
- ・英語教育は学部1・2年、海外派遣は専門教育に入って修士ぐらいまで、との意見が多いようです。
- ・一方で、「**教育段階にかかわらない形態**」という指摘も相当に多く、**教育課程・所属局局にかかわらない柔軟な制度・体制**が、英語教育や学生の海外派遣には望まれるようです。

留学生の受け入れ

●あなたはご自身の研究分野における大学院留学生の数を増やした方がよいと思いますか？



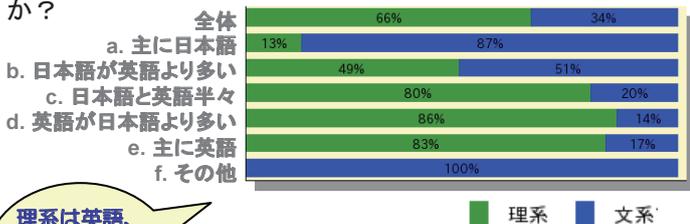
●ご自身の研究分野における大学院留学生を増やした方がよいと思う理由は何ですか？



- ・留学生の受け入れにあたっては「**国際的な人的ネットワークが形成されること**」が期待されています。また、理系では「**日本人学生への刺激**」、文系では「**異文化の視点の導入**」が期待されています。
- ・留学生受入れの問題として「**留学生の教育水準や受けてきた教育内容**」(19%)、そして、「**留学生の生活サポート**」(15%)、「**宿舎**」(13%)、「**奨学金**」(13%)が挙げられました。

研究成果の国際的発信

●あなたはご自身の研究成果を何語で主に発信していますか？



理系は英語、
文系は日本語
による発信が
多い。

その他、「日本語とヨーロッパ言語（独・仏・西・露など）」あるいは、「日本語と中国語」といった方も27名いました。

【研究成果の国際的発信に関する主に文系からのコメント】

・「文化を扱う学問の場合には、言語の違いだけでなく、研究の伝統や問題意識、観点なども全て異なるから理解してもらうことは容易ではない。このため、研究の国際発信の重要性を認識しつつも、自身の研究を優先してしまい、海外発信は二の次になりがちである。

少し手を加えれば海外でも高く評価されるであろう論文が日本語のまま数多く放置されている現状は残念であるが、個人の努力では解決しない。**論文を外国語に翻訳したり、それを海外の流通ルートにのせたりするサポートをシステムティックにやってくれる機関を作ることは有用である。**」と、本場で現在推進中の人文社会科学系著作の翻訳・出版プロジェクトを支持する声が多数、見られました。

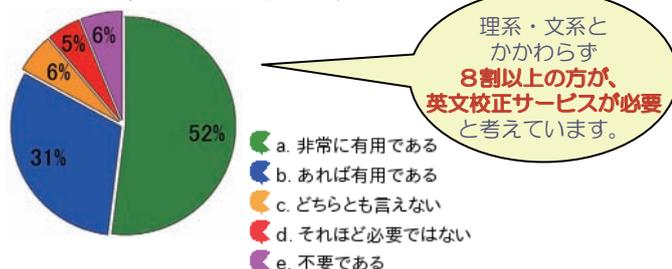
・日本研究については、「研究成果の享受者の多くが英語などの言語を得意としない」といった指摘がある一方で、「日本の歴史（日本の法制）」は日本の顔である。ゆえに国際発信が最も必要な研究分野である。」と、発想の転換を要望する声もありました。

・「国際的発信＝英語による発信」と同義ではない。**国際的発信の必要性が分野ごとに異なる**、との指摘も相次ぎました。

・日本の立ち位置を考えれば、**中国語や韓国語による発信をもっと増やすべき**、との意見もありました。

・「研究成果は、**日常的なコミュニケーションの上で初めて創出され、発信され、受信され、評価される。**」といった国際交流の重要性を指摘する声もありました。

●あなたは学内に学術論文などの英文校正や助言を得られるサービスがあるとよいと思いますか？



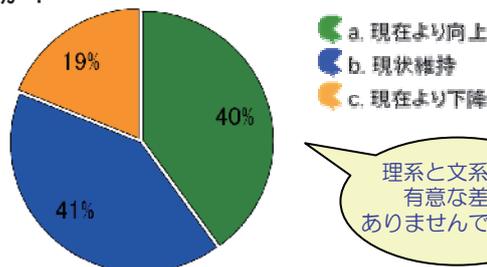
理系・文系と
かわらず
8割以上の方が、
英文校正サービスが
必要
と考えています。

・自由記述欄に、**米国の大学などにおける英文リライト組織に触れ、学内における英文校正サービスの必要性を訴える意見が複数みられました。「有料でも構わない」と**の意見も複数ありました。

・「インターネットを通じた民間の英文校正サービスは、**意思疎通に限界がある。**」という声が率直なところでしう。

研究の国際的な評価

●あなたはご自身の専門分野における東京大学の研究の国際的水準が10年後に現在と比べて維持・向上していると思いますか？

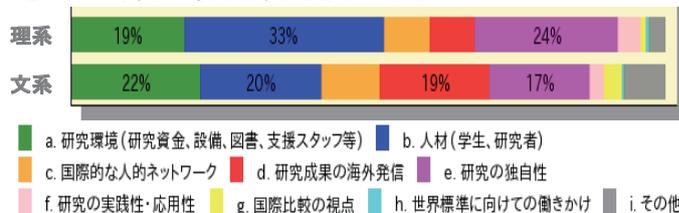


理系と文系とで
有意な差は
ありませんでした。

・研究が下降気味と予測した理由としては、「**優秀な人材（研究者・学生）が集まらない**」が4割を占めました。

・「**研究支援スタッフが貧弱である**」（15%）とともに、その他の理由として、「**研究に割く時間が取れない**」との指摘も相次ぎました。

●ご自身の専門分野において世界で評価される研究をするためには、何が最も必要だと思いますか？



a. 研究環境（研究資金、設備、図書、支援スタッフ等）
b. 人材（学生、研究者）
c. 国際的な人的ネットワーク
d. 研究成果の海外発信
e. 研究の独自性
f. 研究の実践性・応用性
g. 国際比較の視点
h. 世界標準に向けての働きかけ
i. その他

・理系は、**1) 人材、2) 研究の独自性、3) 研究環境**がより重要と考えています。

・文系は、**1) 研究環境、2) 人材、3) 研究成果の海外発信、4) 研究の独自性**が重要と考えています。

【研究の国際的評価に関するコメント】

・「国際的評価なるものを気にしては、**真の創造はあり得ない。**」、「**アメリカ中心主義でトピックスに流行がありすぎる。流行優先で米国の研究レベルはあまり高くない。しかし、国際的評価は米国人の興味に左右されすぎている。**」、「**独創性が認められる評価基準（モノサシ）を新たに提案していただきたい。現在の評価基準は、あくまでも現在の価値で算定されているようにおもえてなりません。**」といった、**国際的評価を気にすることの弊害が多数、指摘**されました。

・**評価基準が確立していない先駆的・独創的な研究、数十年後・数百年後に評価される地道な研究活動（標本の採取など）の評価方法を確立する必要性が指摘**されました。

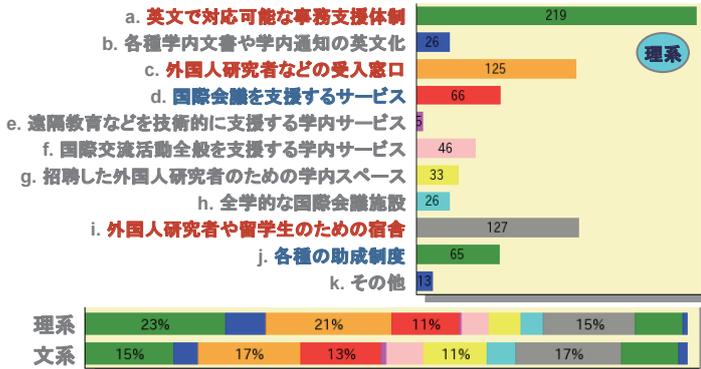
・法人化以後に講座制が復活していることを指摘し、**講座制の弊害（若手研究者の自立阻害、外国人教員に対する魅力欠落、小規模な研究体制）**を指摘する声が多数ありました。

・論文受理や国際的評価を得るための人的繋がりの必要性を指摘する声もありました。

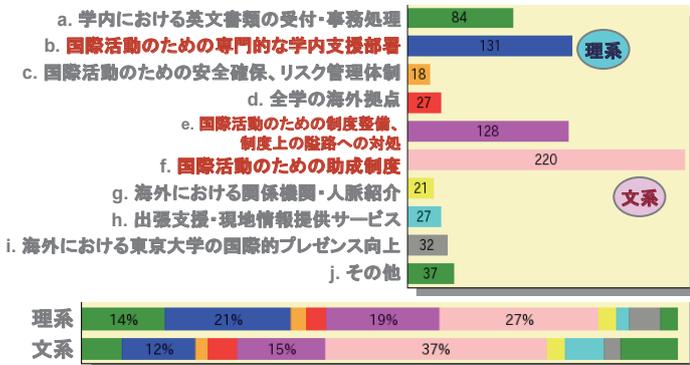
・自身に対する「**国際的評価・国内的評価・学内の評価**」が異なる、と指摘する声も多数見られました。

国際活動の支援体制

●あなたが学内において外国人研究者等を受け入れたり、国際会議を開催したり、海外大学と教育連携などをしたりするにあたって、体制を強化してもらいたい点を教えてください。



●あなたが海外で教育研究活動を展開する上で、支援を強化してもらいたい点を教えてください。



●あなたは海外で活動するにあたって、どのような点で不安を感じたことがありますか？



【国際活動の支援体制に関するコメント】

・「国際的活動を行う支援体制があるとは思えない。すべて教員任せで・・・。」**「常時海外に多くの社員を派遣する企業並の対応があるべき」と**いった不満の声が多数ありました。

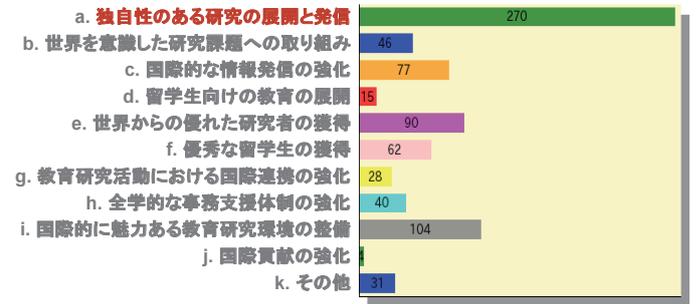
・**海外からの物品調達の不便**（直接購入が困難、事務書類の翻訳の必要性）を指摘する声が多数ありました。また、**研究費の使い方について、日本独特のルールと現地ルールの違いを明確にしておく必要性**も指摘されました。

・細かいところで、**「英語での顔写真入りの身分証明書」**に対する要望が複数見られました。また、国際交流の重要性を指摘した上で、海外滞在時の学内におけるバックアップ体制の確立など、**「サバティカルを実際にとれる仕組み作りに対する要望」**が多数寄せられました。

「東京大学の国際化」に関する意見

◆教員の声

●東京大学が世界の中でさらに発展していくために、特に何に力を入れていくとよいと思いますか？



【教員からのコメント】

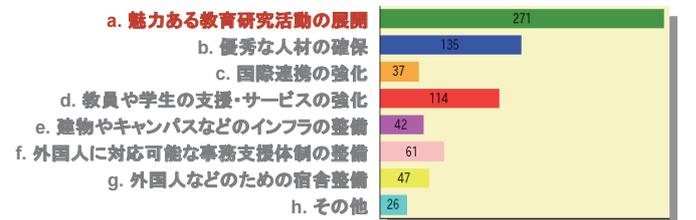
・単純に「世界トップ」を望むだけでなく、「**アジアを代表する総合大学として、世界一レベルのサイエンスの最先端を研究すると同時に、日本・アジアに関する研究の中心となる**」といった、**「アジアを意識した声」**が目立ちました。

・一方で、**世界の研究者・学生から「東京大学に行ってみよう」と思われるような魅力ある大学像**を求める声が多数ありました。

・そのために、**地に足の付いた教育研究活動を行い、独創的な研究を日本から発信**することを、多数の方が要望しています。

◆職員の声

●あなたは東京大学が世界の中で魅力ある大学になるために、何に特に力を入れていくとよいと思いますか？



【職員からのコメント】

・「英語以外に、**中国語・韓国語による対応を忘れずに**」との意見を複数いただきました。

・**「国際化以前に、業務の簡素化が第一。この煩雑な業務を英語化するだけで、莫大な業務量となる。」**といったコメントも複数いただきました。

【備考】

本集計では、「理系・文系」をご回答いただいた方の所属部局を元に分類しました。

○理系＝理学系研究科；工学系研究科；農学生命科学研究科；医学系研究科；薬学系研究科；数理科学研究科；新領域創成科学研究科；情報理工学系研究科；医科学研究所；地震研究所；生産技術研究所；分子細胞生物学研究所；宇宙線研究所；物性研究所；海洋研究所；先端科学技術研究センター；全学センター；機構など

○文系＝人文社会系研究科；教育学研究科；法学政治学研究科；経済学研究科；総合文化研究科；情報学環・学際情報学府；公共政策大学院；東洋文化研究所；社会科学研究所；史料編纂所；本部；その他

※この調査はインターネットアンケート形式で行われたため、調査結果に一部バイアスがかかっている可能性がありますこと、ご注意ください。

職員の声

- I. 外国語による対応
- II. 文書の英文化
- III. 国際関係の研修

- IV. 国際関係の業務
- V. 国際案件を担当するスタッフ
- VI. その他、全般的な意見

職員の語学能力

●英語能力



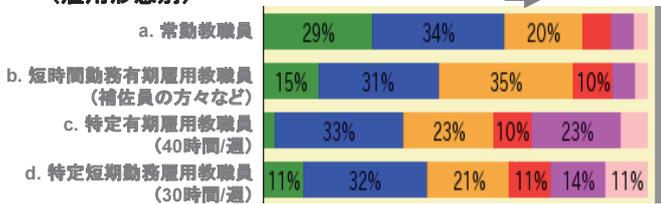
・英語で業務対応可能な方は、アンケートに回答して頂いた方の約44%を占めます。日常会話程度も含めると76%が英語でなんらかの対応ができます。

(業務内容別)



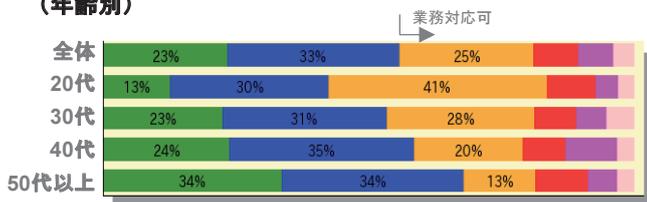
...基幹系(総務・人事・会計)や教務・研究協力系は英語による対応が難しい。

(雇用形態別)



...しかも、事務補佐員や有期雇用の方々の英語による対応可能性の方が高い。

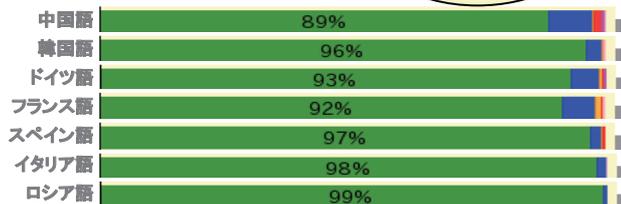
(年齢別)



若い世代に期待しましょう。

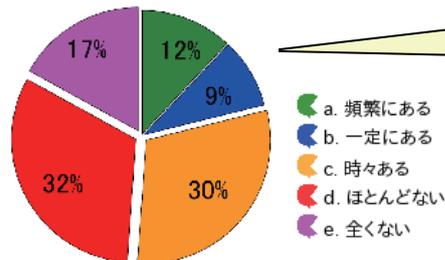
日常会話であれば、中国語、仏語、独語ができる人も!

●その他の言語

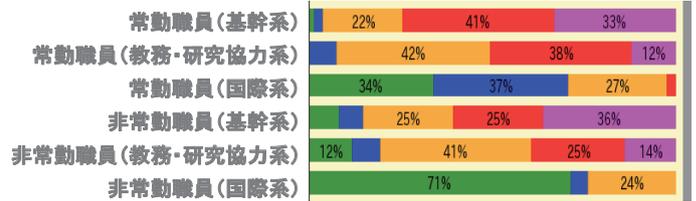


外国語による対応状況

●外国語による窓口対応や外国語文書の取り扱い、海外との連絡調整など、外国語で対応しなければいけない案件はどの程度ありますか？

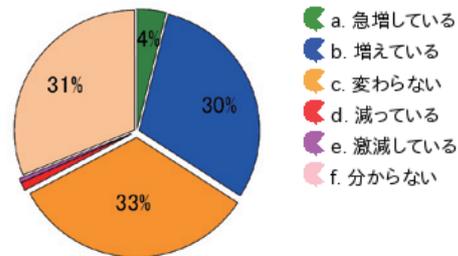


2割以上の方が外国語で対応

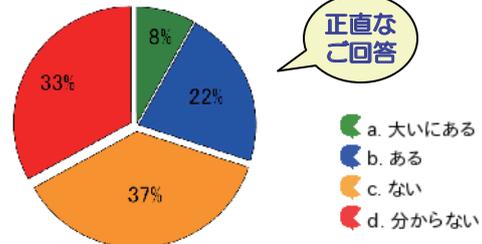


基幹系や教務・研究協力系の常勤職員は外国語による対応が少ないが、実は非常勤職員が対応をしている?!

●そのような案件は、過去5年間でどのように変化していると思いますか？



●あなたが現在担当している業務について、事務組織で本来対応する案件が、外国語であるが故に事務組織で対応されていない、ということはあると思いますか？

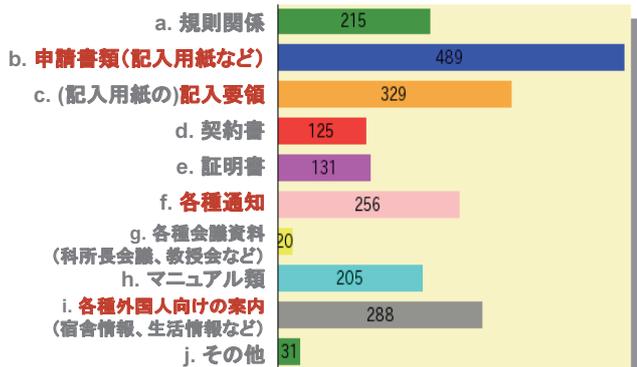


正直なご回答

・業務で外国語が必要とされる場面は、確実に増えているようです。また、そのような中、事務組織による対応が十分にできていない場面も増えているようです。

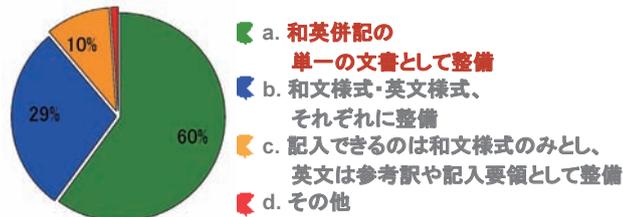
文書の英文化

●どのような文書が英文で整備されると有用とご思いますか？
緊急度の高い文書を3つまで挙げてください。



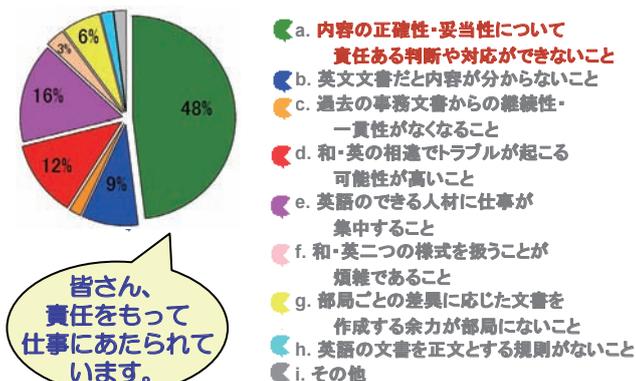
記入書類や外国人向け案内、各種通知など、**外国の方が直接、手にすることの多い文書の英文化が要望されています。**

●申請書類などの「記入式の文書」をどのように整備するとよいとご思いますか？



自由記述にも、「**語学に自信がないからこそ和英併記の文書を望む。**」との声が複数ありました。和・英別々の文書だと、それら文書の対応関係が分かりにくく、かつ、文書管理が煩雑になるという指摘もありました。

●英文の事務文書を取扱う場合、何が特に問題となりますか？



皆さん、責任をもって仕事にあたられています。

【文書の英文化に関するコメント】

・文書を単に英文化するだけでなく、**ネイティブチェックをかけることの重要性**を指摘する声が複数ありました。公文書対応も可能な専門家を要望する声もありました。

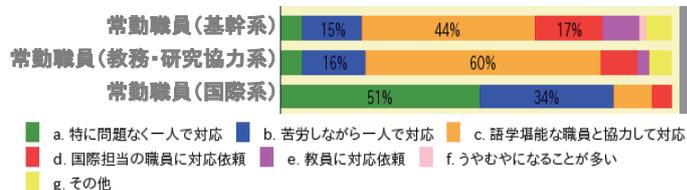
・また、大学特有の用語については、**和英対応表を整備**して欲しいという要望も多数ありました。また、規則改正等に時々刻々と対応できるように、**不断のメンテナンス**を指摘する声も。

・部局ごとに英文を整備した場合、全学的に整合性の取れなくなる可能性が高いため、**全学統一様式を求める声も多くありました。**

外国語による対応のための体制と国際関係業務の実施体制

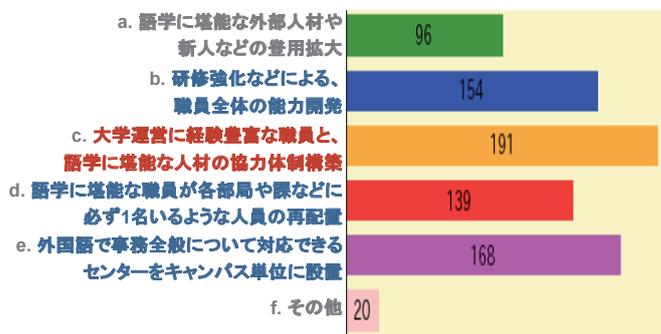
◆日常業務における外国語による対応

●あなたは外国語の文書、あるいは、英語による対応の必要が生じた場合、どのように対応していますか？



国際系以外では、**語学堪能な職員と協力して対応している**場合が多いようです。

●外国語による窓口対応や外国語による事務文書の取扱いが増えた場合、どのような体制をとるとよいとご思いますか？



外国語で対応できる体制の整備方法については、意見が分かれましました。職員全体の能力開発も期待されるなど、**語学のできる人に完全に任せるのは躊躇われる**ようです。

◆国際関係業務の実施体制

●国際関係の業務を担当する上でどのようなことが特に大変でしたか？

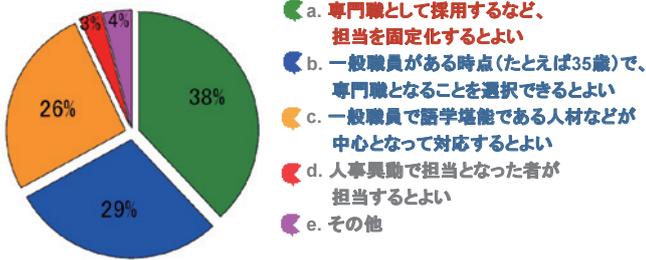


・国際関係業務では、単に外国語による対応だけでなく、協定締結、留学生・外国人研究者受入、海外からの調達・契約などにおいて**国内外の諸制度に関する知識や対応を要求され、皆さん苦勞**しています。

・国際関係業務への対応が図れるように、**OJT(26%)**とともに、「**職員間のノウハウ共有のための意見交換会**」(16%)や「**ノウハウの蓄積・伝達**」(17%)、そして、これら業務に必要な「**技能習得研修**」(14%)に対する要望が多く寄せられました。

国際案件を担当するスタッフ

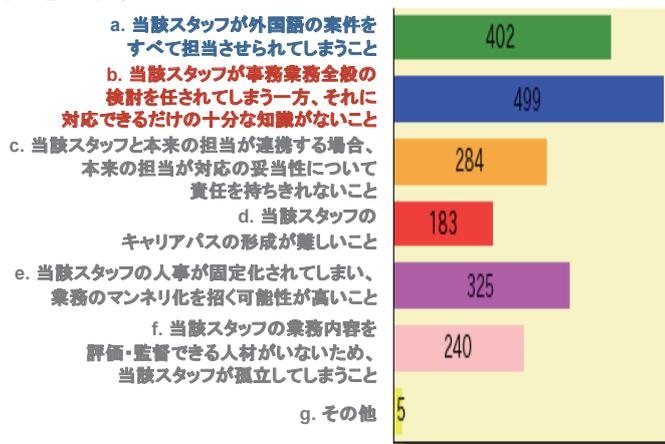
●国際関係を専門に担当するスタッフは、どのように確保する
とよいと思いますか？



●国際専門スタッフの業務はどのように設定するのがよいと
思いますか？



●国際専門スタッフについて、どのようなことが特に問題とな
ると思いますか？



【国際案件を担当するスタッフに関するコメント】

・国際案件を担当するスタッフについては、必要性は認めつつも、**担当が固定化することによる弊害(監督の難しさ、仕事を担当者によって制限される一方で、逆に全ての国際案件を押しつけられるなど)**を指摘する声が多数見られました。

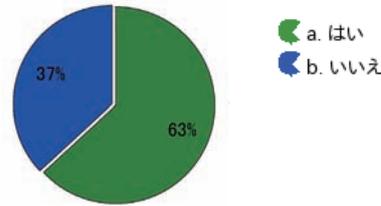
・このため、**国際職員の人事のローテーション**や**国際職員間の交流・情報交換、国際職員と一般職員間の交流・情報交換の重要性**を指摘する声が相次ぎました。

・また、**語学が出来るだけではダメで、「教務・人事・経理等々、大学の業務全般に通じた経験と知識を有する者の中から探し出す必要がある」と**の指摘も相次ぎました。

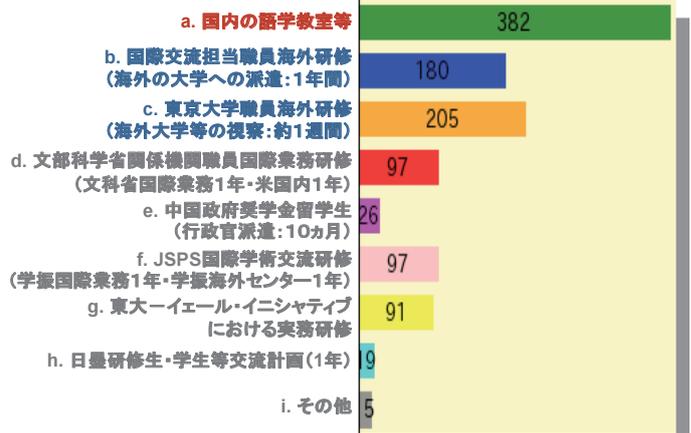
・一方で、**そのようなマルチ人材は少ないため、一般職員の養成をしつつ、当面は部署ごとに今いる人材で柔軟な体制を採るとよい、という現実的な指摘**もありました。

国際関係の研修(一般職員)

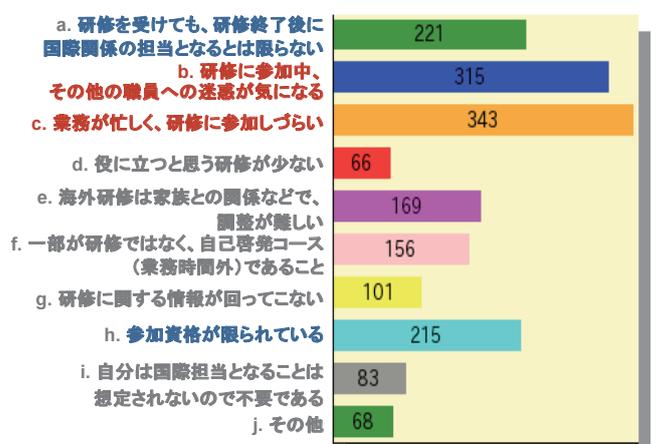
●あなたは国際関係の研修(自己啓発コースを含む)に参加
してみたいと思いますか？



●具体的にはどのような研修に特に参加したいですか。



●現在行われている国際関係の研修(自己啓発コースを含
む)について、どのような点が特に問題と感じていますか？



【国際関係の研修に関するコメント】

・**研修に送り出す部署への人員配置等のバックアップ制度が必要**という声が多数ありました。

・単なる「習い事」感覚とならないように、**実務に直結する研修内容(電話対応、ビジネス文書等)と明確な目標設定(研修終了後に就く職務・業務の明示)**が重要、という指摘も複数ありました。一方で、**語学研修が重要**という声も多数寄せられました。

・**コミュニケーションマニュアル(電話対応、窓口対応)**を用意し、**2日程度の実践的英語研修を全職員に課すとよい、**といったアイデアもありました。

・**職員と留学生との交流、留学生のための日本語教室にアシスタントとして参加するとよい、**といったアイデアもありました。

今回は、東京大学の国際化に関する「学生の声」を特集します。 教員との意見・見解の違いはどのようなところに現れるか?!

次回 特集予告

【担当者より】

このたびは、アンケートにご協力いただき、皆さま、ありがとうございました。教職員の2割近くの方の声をいただくことができ、ほっとしています。

この学内広報では紙面の都合上、ダイジェストの調査結果しか紹介できませんでしたが、国際連携本部のHPでは詳細を紹介しています。特に、自由記述では有益な意見を多数いただいております。ご参照ください。

なお、職員アンケートでは図書系、医療系や技術系、そして、国際関係を担当する教員の方々などからも多数のご意見をいただきました。学内広報では紙面の都合上、事務職系職員に焦点をあてて調査結果を紹介しましたが、「東京大学国際化白書（仮称）」および東京大学の国際化推進長期構想を策定するにあたっては、頂いた声を十分に反映していく予定です。

長期構想の策定にあたっては、学内の声をできるだけ取り入れていきたいと思っています。ぜひ、いろいろなご意見をお寄せ下さい。

この「東京大学の国際化に関する意見と要望調査」のインターネットアンケートは、無料Webアンケートサイト「efeel」を利用しました。

管理者の伊藤氏には、データのバックアップやその他の細々とした調整につき、大変ご協力いただきました。

この場にて、お礼を申し上げます。

[アンケートサイト]

URL: <http://www.efeel.to/>

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

学生担当理事 浅島 誠 (VP Makoto Asashima)

教育担当理事 岡村 定矩 (VP Sadanori Okamura)

●Period July 10th – August 11th, 2008

●Survey インターネットアンケート形式 Online Survey

●Target 東京大学の全学生 (学部・大学院、留学生、研究生等含む) All currently enrolled Todai students (undergrads, grad students, international students and research students)

Information 東京大学国際連携本部 Division for International Relations, TODAI E-mail: intl_framework@adm.u-tokyo.ac.jp U.R.L.: <http://dir.u-tokyo.ac.jp/>

東京大学の学生の皆さまへ 東京大学国際連携本部では本学の教育の国際化について、学生の皆さん一人一人から意見や要望をインターネットアンケート形式で募集しています。調査結果は2009年度に策定される「東京大学国際化推進長期構想」の参考に供されます。この機会にぜひ、色々なご意見をお寄せ下さい。

<http://www.efeel.to/survey/ut-student-jp/>

(日本語版)

Dear Todai students The Division for International Relations at Todai asks you to give us your views about learning at Todai by participating in an online survey. The survey's findings will become a basis for the "Long-Range Plan for the Promotion of Internationalization at the University of Tokyo" to be drafted in 2009. Please use this opportunity to send us your comments and suggestions. Thank you!

<http://www.efeel.to/survey/ut-student-eng/>

(English)

【本件問い合わせ先】

東京大学国際連携本部国際企画部

担当: 中川淳司・船守美穂 (ext.21683)、本部国際系・三枝和輝 (ext.20263)

E-mail: intl_framework@adm.u-tokyo.ac.jp

調査結果URL: http://dir.u-tokyo.ac.jp/gaiyo/gakunai_chousa/ (学内のみ)

NEWS

フンボルト賞受賞

大学院数理科学研究科・小林俊行教授のフンボルト賞受賞が決定いたしました。

小林俊行 数理科学研究科 教授

小林俊行教授がドイツの2008年度フンボルト賞（数学部門）を受賞した。

この賞は、医学・数学・物理・農学・哲学・法学など、自然科学から人文科学、芸術にいたる23部門対象に対してアレキサンダー・フォン・フンボルト財団が与える国際賞であり、学問における重要な発見もしくは新しい理論開拓を行い、後世に残る業績を挙げた研究者であって、かつ将来に向けて引き続き学問の発展を牽引することが期待される者に対して授与される。同財団の最も荣誉ある賞であり、物理部門では過去に、小柴昌俊特別荣誉教授（1997年）や有馬朗人元総長（1988年）が受賞されている。

小林教授は、無限次元における対称性の破れを代数的に記述する数学理論、リーマン幾何学の古典的な枠組みを超えた不連続群の理論、複素多様体における可視的作用の理論など、代数・幾何・解析にまたがる壮大な理論を次々と創始し構成することに成功しており、数学の新しい研究領域を独創的な手法によって開拓し、数学研究の新しい流れを生み出したことが国際的に高く評価されて今回の受賞に至った。

授賞式は6月24日（火）、ドイツ大統領臨席のもと、大統領官邸であるベルリンのベルビュー宮殿において挙行された。



一般ニュース

埋蔵文化財調査室

追分新国際宿舎（仮称）建設予定地の発掘調査報告



埋蔵文化財調査室は、2007年12月より2008年3月まで、追分新国際宿舎（仮称）建設予定地の発掘調査を行った。調査地点は「日光御成街道」（現、本郷通り）の西側に位置しており、街道の両側には御先手組の屋敷、寺地、町屋が配置されていた。調査地点は御先手組の御家人屋敷にあたる。

調査の結果、2004年に閉鎖された、追分学寮の学生宿舎第1棟と新棟の基礎、江戸時代の建物跡、地下室（ちかむろ）、井戸、畑、植栽痕、ごみ穴などを検出した。江戸時代の屋敷割を知ることができる『屋敷渡預絵図証文』には、「日光御成街道」の西側に沿って、「組屋敷道」と記載された細い帯が書かれている。調査区東端で、通りと平行する固く突き固められた道を検出した。これが「組屋敷道」と考えられる。

江戸時代の遺物は、陶磁器、土製人形などの生活道具、生ごみとして捨てられたアサリやハマグリ、魚骨、生ごみに集まったオカチョウジガイ（陸産微小貝類）が出土した。

注目される遺物に、鉢の底に穴をあけ、植木鉢に転用した瀬戸美濃製の陶器鉢40個体、剪定鋏がある。これらの遺物は植木屋の存在をうかがわせ、幕府が武家屋敷で禁じていた町人などの居住や土地利用を反映した遺物と考えられる。この地は江戸時代「駒込鰻縄手」（こまごめうなぎなわて）と呼ばれていた。「鰻縄手」の由来には諸説あり「植木縄手」「苗木縄手」が「鰻縄手」となったとの説があるが、禁止されていた植木屋の存在が、「植木縄手」を「鰻縄手」と言い換えたさせたのかもしれない。近年、駒込からソメイヨシノで著名な染井周辺で植木屋の調査が増加しており、今後、これらの調査例と当地点の成果によって、江戸の園芸文化を担った植木屋についての解明が進むことを期待している。

発掘調査は、文化財保護法「文化財の保存と活用」理念のもと常時公開した。2008年2月1日（金）・2日（土）に向丘町会、文京区教育委員会、文京ふるさと歴史館に協力いただき、遺跡見学会を行った。両日で400名の参加があった。見学会終了以降、400名の見学者があり、見学会と合わせて800名の方が遺跡を訪れた。また、遺跡に隣接する都立向岡高校2年生日本史選択の生徒を対象に講義を行った。1月17日（木）は調査地点と浅野

地区で遺跡見学会を行い、2月21日（木）は同校で「東京大学浅野地区と幕末維新」をテーマに講義を行った。

今後、建設される宿舎には周辺住民が利用できる会議室の設置が計画されており、会議室に出土遺物と研究成果、追分学寮史の展示施設設置を要望している。展示施設の設置が、周辺住民とこれからこの地の住人となる外国人留学生に、追分学寮の歴史、江戸時代の生活、園芸文化といった「Edo culture」を知っていただくきっかけとなれば幸いである。



現場見学会 2008年2月1・2日開催



追分新国際宿舎から出土した江戸時代の遺物

本部学生支援グループ 調理者研修会を開催

一般

学生支援グループでは例年、夏季繁忙期を前に保健体育寮（スポーティア）及び検見川総合運動場における調理従事者のための「調理者研修会」を開催している。食品衛生に関する専門知識を習得し、調理業務における資質向上を図ることを目的としており、今年は危機管理意識からAED講習も加わり、盛りだくさんな内容となった。

6月24日（火）から26日（木）にかけて行われ、栗本孝子講師（管理栄養士、奨学厚生グループ厚生チーム）による食中毒の防止や食材の保存法など衛生管理、実際の業務運営についての講義、調理実習、セコム担当者によるAED講習会が行なわれた。

AED講習では呼気の確認に始まり、周囲にいる人達への指示や心臓マッサージ、人工呼吸、AEDの使用法など。人形2体を用いて受講者全員が緊迫感のある実習をすることが出来た。

調理実習では、栄養満点かつ大人から子供まで人気がある「カレー」を取り上げた。各施設調理者が分担して作ったカレーは6種類で、タンドリーチキンとホワイトカレーや茄子とトマトのカレー、ミートボールカレーなど。お店で食べている気分になる、かなり本格的なものが完成した。

皆様もこれからの季節、各保健体育寮や検見川総合運動場をご利用いただき、この研修会での成果をぜひ体感して下さい。管理人一同、皆様のお越しを心よりお待ちしております。

ご予約・お問い合わせは本部学生支援グループ体育チーム（内線）22510まで。



AED講習会の様子



試食の際はライス、ナン、パンなどを添えて

本部環境安全グループ

「安全シンポジウム」、開催される

一般

7月4日（金）の本学安全の日、弥生講堂において、安全シンポジウムが開催された。

同日は八丈島にて農学生命科学研究科の山下高広氏が潜水作業中に死亡する事故が発生してから3年となる。本学では7月4日を『安全の日』と定め、事故の記憶を風化させることなく、教育研究活動における安全衛生の向上、事故災害の発生防止、安全意識の向上に取り組むことが決意されている。

冒頭にて小宮山総長より「大学は一般企業とは異なり安全確保が難しい面があるが、安全遵守は上位概念であり、職員・学生に徹底すること、相当の具体的努力や実践することが大切である。」との挨拶があった。

当日、大学における防災（実験室、その他）をテーマにした第1部では、平成7年阪神淡路大震災にて実際に被災された神戸大学の実験室（化学、バイオや医学、動物実験、機械設備等）の被災状況、学生教職員の被災・安否確認、実験室安全のための緊急対応や復旧、地震等自然災害に対する神戸大学の取り組みの現状について講演及び質疑応答が行われた。

また第2部では関東大震災における東京大学の被災状況と被災後の対応、首都直下地震対策、緊急地震速報、フィールド研究、首都圏大規模氾濫の被害想定とハザードマップ、防災情報の課題などの講演、及び北海道演習林という厳しい自然環境の中で作業にあたる教職員の安全確保、演習林で研究教育に当たる教員・学生の安全管理について講演及び質疑応答が行われた。

またロビーには、消防署やメーカーによる保護具・防災用品、防災・安全衛生関係パンフレット、農学部の安全活動報告（パネル）の展示があり、会場は学内の安全衛生管理担当の他、約200名の学内外参加者が詰め掛け関心の高さがうかがわれた。



総長による冒頭挨拶



保護具を見学する参加者

本部留学生支援グループ

平成20年度第1回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される

一般

教職員ならびに卒業生の方々などからの寄附金で運用されている「外国人留学生支援基金」は、平成20年度第1回奨学生（奨学金月額5万円／支給期間：平成20年4月～平成21年3月）として20名の留学生を採用し、7月10日（木）に奨学生証書授与式を開催した。式は、坂野留学生センター長（外国人留学生支援基金運営委員会副委員長）から奨学生に証書が手交され、「外国人留学生支援基金は教職員、卒業生等の方々の寄附により運用され、学業が優秀な留学生に対して奨学金として支給されるものである。奨学生の皆さんの留学生活に役立てて、研究・勉学に励んでほしい。」との挨拶があった後、奨学生を代表して大学院公共政策学教育部専門職学位課程の郭潔琳さん（中国）から、「東京大学の教職員、卒業生の皆様、日ごろの勉強と研究だけではなく、この度は経済面においてもサポートしていただき非常に感謝しています。私たちはぜひ、このご好意を生かし、将来私たちも留学生をサポートできるように、今後の勉強と仕事で頑張っていきたいと思います。」との謝辞が述べられた。

なお、本奨学金受給者は、前身の外国人留学生後援会から通算して今回で260名となった。ここに本基金の趣旨に御賛同いただいている皆様の御支援に対し、改めて御礼申し上げる次第である。



謝辞を述べる郭潔琳さん



東京大学外国人留学生支援基金平成 20 年度第 1 回奨学生

海洋アライアンス

海洋アライアンス・シンポジウム 「海と人類との新たな接点」開催される

一般

7月15日(火)、本学鉄門記念講堂において、東京大学海洋アライアンス主催によるシンポジウム「海と人類との新たな接点」が開催され、学内外から約300名もの参加者が集まった。

海洋アライアンスは2007年7月に総長室総括委員会の下に分野横断的な機構として発足したが、それ以前から、シンポジウム「東京大学の海研究」を企画しており、今回は3回目の開催となる。

2008年4月からは、日本財団の助成を受け、海洋基本法を支える研究基盤の構築と、その理念を具体化させる海洋政策の実現を担う人材の育成を目指した「総合海洋基盤(日本財団)プログラム」を開始している。

今回のシンポジウムでは、これまでの内容構成に加え、海洋アライアンスのシンクタンクの役割を果たすべく、ミニシンポジウム1「油濁汚染と国際技術基準の交渉戦略」とミニシンポジウム2「海底熱水鉱床の開発問題に関する海洋アライアンスの取り組み」が新たに設けられた。前者は学外から招いた研究者で構成され、油濁汚染に関する制度や規則を国際的な視点から検討し、後者は学内からの研究者で構成され、排他的経済水域にある深海鉱物資源開発に関して、地学・環境・法学の立場から意見を交換した。

これら2つのミニシンポジウムを挟んだセッション1、2では、学内の研究者がバラエティーに富んだ研究を紹介した。セッション1では、現在問題となっている水産物の安全性や、遺伝子研究において実験動物が重要な役割を果たしていることが強調された。さらにセッション2では、海の温度構造や土砂の動きを解明するための工学的アプローチや沿岸域をめぐる人的ネットワークと国際政治についての発表が行われた。

最後に、浦環機構長が海洋アライアンスの今後の展開について熱のこもった発表を行い、閉会となった。

本学では、海洋に関連する分野の研究者は170名を超え、それぞれの部局で活動しているが、本シンポジウムを通して、海洋研究の多様性を知る良い機会となった。

※下記のURLから当日の様子がご覧いただけます。

海洋アライアンス ホームページ

(<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp>)



ミニシンポジウムでの総合討論



活発な質疑応答

学生相談ネットワーク本部

教職員のための「コミュニケーションスキルアップ」講習会

一般

7月17日(木)に学生相談ネットワーク本部主催、教職員のための「コミュニケーションスキルアップ」講習会を武田ホール(武田先端知ビル)で開催した。学生相談ネットワーク本部主催の講習会は、6月に開催した「学生のためのメンタルケア」講習会に続く第2弾で、今回はコミュニケーションをテーマに、大学院情報学環・原島博教授の講義「いい顔が、いい人間関係を作る」及びNPO法人アサーティブジャパン・森田汐生代表理事の演習、ロールプレイによる「アサーティブトレーニング」を行った。

アンケートの結果から、95%以上の参加者から「講習会の目的を達成できた」、90%以上の参加者から「今後の業務に活かせる」との回答を得た。講習会に参加したきっかけについては、90%以上の参加者が「本人の希望」または「プログラムに興味があって参加した」との回答で関心の高さが窺えた。特に、「顔学」は内容の親しみ

やすさと新鮮さで好評を得、「アサーティブトレーニング」の参加型演習についても、従来の講義主体の講習よりも実践に即して役に立ったとの意見が目立った。参加者は11部局等から103名(うち教員17名、職員86名)にのぼった。

【学生相談ネットワーク本部・今後の講習会予定】
「学生のメンタルケア講習会」

・10月24日(金) 駒場キャンパス

・11月5日(水) 柏キャンパス

※9月頃メールにて各部局宛に開催通知をお送りいたします(なんでも相談コーナー)。



【いい顔が、いい人間関係を作る】「顔学」講義



【爽やかに自己主張】アサーティブトレーニング演習

本部環境安全グループ
総長による「安全パトロール」、実施される

一般

7月18日(金)、分子細胞生物学研究所において、総長による安全衛生パトロールが実施された。

本学では毎年7月4日を「安全の日」と定め、7月を安全月間として教育研究における事故防止と安全の確保について再認識するための催しをおこなっている。総長パトロールは、本学の安全に対する姿勢を総長自ら示すものである。

当日は、小宮山総長をはじめ、岡村環境安全担当理事、中西環境安全本部長ほか環境安全本部6名、宮島分子細胞生物学研究所長ほか関係者5名により、総合研究棟、生命科学総合研究棟内の4研究室の実験室等を巡視した。

保護めがねの着用が実験室での安全確保の基本であるため、パトロールでは総長自らが率先して着用した。現場では担当教員から研究内容の説明を受けたのち、機器の安全取扱、設備の固定、薬品の保管状況、保護具の装着・準備状況、避難経路などについて詳細な点検が行われた。また、安全が確保された上でさらなる教育研究を発展させることが再確認された。

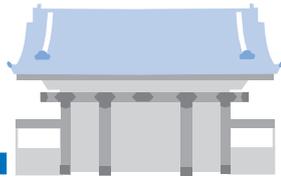


実験機器の安全使用について意見交換



薬品の保管状況について確認

部局 ニュース



物性研究所

「フライホイール発電機」運転開始式典が開催される

部局

5月16日（金）、「フライホイール発電機」の運転開始式典が柏キャンパスにおいて行われた。式典は、嶽山正二郎附属国際超強磁場科学研究施設長の開会の辞に始まり、家泰弘物性研究所長の挨拶の後、来賓によるテープカットが行われた。本式典のメインイベントである「フライホイール発電機」スイッチ投入は岡村定矩理事・副学長により行われ、無事に運転が開始された。「フライホイール発電機」の加速を待つ間に、日本原子力研究開発機構を初めとした関係協力機関に感謝状が贈呈された。式典は、金道浩一教授による装置の概要説明に引き続き、上田和夫物性研究所前所長による磁場発生スイッチ投入で締めくくられ、その後、祝賀会が行われた。祝賀会では、岡村定矩理事・副学長、桑田悟文部科学省学術機関課長補佐、浅羽大嗣柏市副市長、ミハエル・フォン・オルテンベルグ フンボルト大学教授等による祝辞が述べられた。当日は天気にも恵まれ、学内外から100名以上の参加者があり、盛況のうちに式典は終了した。

本式典で運転を開始した「フライホイール発電機」は、世界最大の直流発電機であり、核融合試験装置JFT-2Mの一部として約10年間、日本原子力研究開発機構において使用されたものである。これを強磁場発生用電源として再利用する目的で柏キャンパスに移設した。これは、特別教育研究経費で進行中の事業『国際物性研究拠点：強磁場コラボラトリー』の一環で行っており、今後、世界に先駆けて平成21年度までにコンデンサー電源と組み合わせた100テスラのロングパルス磁場の発生を目指し、全国共同利用研究に供する予定である。



フライホイール発電機の前でのテープカット



岡村定矩理事・副学長による
運転開始スイッチ投入

史料編纂所

日露関係史料をめぐる国際研究集会開催される

部局

5月20日（火）、史料編纂所（横山伊徳所長）と日本学士院主催による「日露関係史料をめぐる国際研究集会2008」が、上野の日本学士院で開催された。

史料編纂所では、ロシアに所在する日本関係史料の系統的な調査・研究と収集に力を入れており、ロシアの文書館（アーカイヴズ）や研究機関と協力して史料調査や目録作成に取り組んできた。今回の国際研究集会もこのプロジェクト（代表者：保谷徹教授）の一環として開催された。

当日は、ロシアからの招聘報告者3名を含め、4本の報告があった。



国際研究集会で幕府使節団の集合写真に見入る参加者たち

新潟大学の麓慎一准教授は、日本開国期における帝政ロシアのサハリン島政策を論じ、ロシア領アメリカ経営の中継地としてサハリンを位置づけたプチャーチンと、プリアムール支配のためのサハリン全島支配を重視した

東シベリア総督ムラヴィヨフ、これを継承したコロサコフらとの対立関係が背景にあったことを明らかにした。次いで、ロシア国立海軍文書館ウラジミル・ソボレフ館長は、1739年の第二次カムチャッカ遠征に参加し、日本沿岸を探検したシュパンベルグの航海日記について報告をおこなった。ロシア国立歴史文書館アレクサンドル・ソコロフ館長は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、帝政ロシアが日本の皇族や政府高官に与えた勲章など、叙勲関係の史料群について論じた。また、サンクトペテルブルグ国立大学ワジム・クリモフ教授は、ロシア帝国外交史料館の所蔵史料調査にもとづいて、1862年の竹内使節団のロシア訪問について報告した。新たに発見された使節団の大判集合写真の紹介も目を引き、それぞれの報告には活発な質疑があった。休憩時には、ヨーロッパでも最大級の文書館である歴史文書館の新館移転に関するビデオが上映された。



日本学士院久保正彰院長（本学名誉教授）へ
記念のメダルを贈るロシア国立歴史文書館ソコロフ館長

研究集会は、日本学士院による国際学士院連合関連日本関係未刊行史料調査事業の一環として行われ、集会に先立って報告者と久保正彰院長（本学名誉教授）の懇談がおこなわれた。また、集会終了後、ロシア人研究者らは鈴鹿市の大黒屋光太夫記念館を訪問し、同市の川岸光男市長へ関連史料のコピーを寄贈するなど、国際交流につとめた。

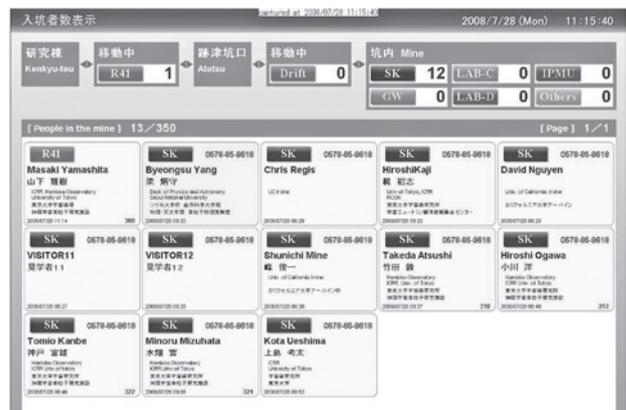
宇宙線研究所 ICカードを用いた安全管理システム を導入

宇宙線研究所附属神岡宇宙素粒子研究施設は、全国共同利用の研究施設であり、スーパーカミオカンデ（SK）実験をはじめとする世界最先端の物理実験及び研究開発が坑内実験サイトで行われている。坑内での実験をより安全に行うため、新たな安全管理システムを導入した。

坑内実験サイトは、研究棟から約10 km離れた鉱山入口からさらに約2 km坑内を進んだ場所に点在している。研究棟と坑内を車で移動する間には事故や落石、また冬には雪崩など様々な危険が伴う。一方、坑内での緊急・災害時に備え、坑内で作業する場合は、常に誰がどこにいるかを把握する必要がある。

そこで、作業者の安全管理をより確実かつ効率的に行うため、ICチップ内蔵のIDカードによる入出坑管理を始めた。坑内作業者は、研究棟、鉱山入口、坑内SK実験サイトに設けられたポイントにカードをかざすことにより、誰がどこにいるかの情報が登録される。その情報は10秒ごとに更新されるモニターに表示され、Web上でどこからでも見ることができる。これによって、万が一移動中に事故があった場合でも迅速な発見と救助が可能となり、坑内作業者が一目で確認できるので、災害時の人数確認も容易になる。

また、この入出坑管理システムは、非接触型ICチップFelicaを搭載したIDカードを利用しているため、施設のIDカードだけでなく、対応する携帯電話やSuicaなども登録して同じように利用することができる。



入坑者管理モニターで誰がどこにいるかを確認できる

さらに、7月からは常駐の警備員を置き、24時間体制で坑内実験サイト、および地上の施設内を巡回警備している。

このように、系統立てた安全管理体制を整備することによって、多くの人がより効率的かつ安全に研究を行える環境を維持していきたい。

大学院教育学研究科・教育学部

附属中等教育学校で第2回「学びの共同体」研究会、行われる

部局

7月2日（水）13時10分～17時まで教育学部附属中等教育学校、新教育棟の多目的室において、2008年度第2回目の「学びの共同体」研究会が行われた。附属学校では、2005年度から「学びの共同体」づくりをはじめている。校内の教職員41人と校外からの参加者8名の計49名で行われた。

授業①（13:10～14:00）は、4年B組で、英語科「Utsukushi is Beautiful」（授業者・宮田静香教諭）であった。導入で新出単語の発音練習が行われ、逐次通訳付き朗読会のためのペアでの発表練習に移った。その後、4人1組の各グループにワークシートが配布された。そこには、教科書の文章の内容を問う質問が提示され、その答えをグループで考えた後、各グループの代表がホワイトボードに英語で答えた。これを、宮田教諭と生徒がやり取りしながら間違いを訂正していった。生徒たちは、与えられた時間の中でグループで真剣に考えていた。

授業②（14:20～15:30）は、3年の選択美術で、「版画制作」（授業者・小澤功教諭）であった。小澤教諭の授業の目標は、「版画を理解する、楽しむ、表現する」であり、生徒は、穴の空いた板や、セルロイドの版を削り、ドライポイントのプレス機を用いて、版画を作成した。生徒は、プレス機に版を入れて、できた版画を楽しそうに眺めていた。授業の終わりに、色とりどりの生徒の作品を床に並べて、生徒は感じたことを語った。

富士市立吉原第一中学校の先生は、「素晴らしい。笑顔が満ち溢れている暖かい世界であり、しっかりとした共同体ができている」と感想を述べた。

指導助言者の大学院教育学研究科の佐藤学教授は「授業①は、やわらかい、いい雰囲気が流れている。発表は、グループのまとめでなくてよい。授業②は、教室がアトリエ・工房的であり、とても良い。」と指摘し、難しいものをみんなで考えること、仲間の声を聴くことを教育することが大切であると述べた。

次回の「学びの共同体」研究会は10月27日（月）、1月30日（金）、また、全校での「公開研究会」は、2月14日（土）を予定している。



授業①の様子



授業②の様子

大学院人文社会系研究科・文学部

外国人留学生・外国人研究員等との懇親会開催される

部局

7月3日（木）18時から、山上会館地下食堂において、人文社会系研究科・文学部主催の外国人留学生・研究員及び外国人スタッフとの懇親会が開催された。

懇親会には、大学院人文社会系研究科及び文学部に在籍する17カ国の外国人留学生・研究員、留学生博士論文作成支援ボランティアネットワークである「三金会」の先生方及び教職員約100名が参加。まず立花政夫研究科長の挨拶があり、続いて林徹国際交流委員会委員長の発声で乾杯した後、懇談が始まった。

懇談は、終始和やかな雰囲気の中、盛会に行われ、「三金会」の先生を代表して、石平快三氏から会の名称の由来や活動状況等を踏まえた留学生とのエピソードを中心に心温まるご挨拶があり、途中、日本語教室のスタッフ、イタリアからの留学生、中国からの留学生による「チャルダッシュ」の合奏があった。ヴァイオリンの美しい音色とカスタネット、トライアングル、タンバリンの軽快なリズムに酔いしれた後、アンコール曲は、韓国からの留学生による「冬のソナタ」の合唱で、参加者から大歓声が沸き上がった。

最後に留学生を代表して、台湾のコウサンサン（博士学生）さんから謝辞があり、大変流暢な日本語の挨拶は、参加者に感銘を与えた。普段は研究活動に忙しい学生達であるが、この日ばかりはそれぞれの国の特色や言葉で友好を深め、楽しいひと時を過ごし、20時頃盛況のうちに散会した。



笑顔で記念撮影



冬ソナンのメロディーに誘われて

大学院総合文化研究科・教養学部

三鷹国際学生宿舎で帰国留学生への
歓送会行われる

7月12日（土）18時から、三鷹国際学生宿舎において、宿舎生会（宿舎に居住する全学生を構成員とする組織）と院生会（留学生の宿舎生活を支援する日本人大学院学生によるチューター組織）の共催により留学生歓送会が行われた。

この会は、この夏9月末までに留学期間を終了し、本国へ帰国する宿舎居住の留学生を対象に行われたもので、留学生の他に日本人宿舎生、三鷹クラブ（旧三鷹寮OBの会）会員延べ100人が参加した。大学からは、鈴木英夫三鷹国際学生宿舎委員会委員長、山田茂同委員会副委員長等の教職員数名が出席し、留学生や宿舎生との交流を楽しんだ。

会には主催者の用意した料理の他、イタリア、スイスの留学生による手作りパスタ料理の提供や、三鷹クラブから後輩を思いやりの握り寿司の差し入れなどがあり、国際宿舎ならではの多彩な料理が並ぶこととなって、料理を堪能しながら和やかな雰囲気の中で会話を楽しむ機会となった。

会の後半には、宿舎生委員会、院生会が共同で製作し、学部長を初めとする大学関係者から寄せられたメッセージを折り込んだスライドや、大学や宿舎での行事・出来事を編集したビデオが上映された。また、留学生からは、

宿舎での1年間の生活を振り返るビデオの披露も同時にあって、留学生は、宿舎での、大学での、そして日本での留学生生活を想い出し、懐かしげにそれらに見入っていた。

最後に、共用棟前の中庭で花火大会が催され、色とりどりの打ち上げ花火を見ながら、参加者は夏真っ盛りの風情を心に刻み、別れを惜しみながら歓送会は21時過ぎに幕を下ろした。



別れを惜しんでのひとこま

分子細胞生物学研究所

分子細胞生物学研究所で留学生と教職員との懇談会を開催

7月17日（木）18時20分より、山上会館談話ホールにおいて、平成20年度分子細胞生物学研究所留学生と教職員との懇談会が開催された。

分子細胞生物学研究所には中国、韓国、ロシア、台湾、マレーシア、インドネシア、シンガポール、インド、アメリカ、フィリピンから総勢21名の留学生（外国人研究者を含む）が在籍し、活発な研究活動を行っている。

この会は普段接する機会の少ない留学生と教職員の懇親を目的に例年開催されており、今回もたいへん蒸し暑い中、総勢約55名の参加があった。

懇談会は世話役でもある横田明准教授の開会の挨拶で開始され、宮島篤所長の挨拶、加藤教授の乾杯の後、和やかに歓談が始まった。

途中、各研究分野に所属する留学生よりスピーチがあり、中には立派な日本語や美しい歌声の披露があり、会場はおおいに盛り上がった。



にぎやかな歓談の後、記念撮影

海洋研究所
恒例の一般公開を開催

海洋研究所は、恒例の一般公開を7月19日（土）に中野地区で、海の日の7月21日（月）に岩手県大槌地区の附属国際沿岸海洋研究センターで開催した。

中野地区では梅雨明け初日の猛暑の中、550名を越える来場者が訪れ、昨年に続き大盛況となった。海底堆積物を用いた砂絵、海藻の押し葉、タッチプール、普段あまり人目に触れない部屋を回る「研究所ツアー」など、子供から大人まで楽しめる体験型の企画が数多く用意され、アンケート結果からは来場者の満足度と来年への期待が非常に高いことが窺えた。



サメとご対面（中野地区）



地球の自転の影響を模型を使って
 分かりやすく説明（中野地区）

大槌地区では、終日曇り空で、最高気温23度の比較的涼しい環境の中での開催となった。今年も、大船渡市を主会場として岩手県沿岸部で「海フェスタいわて」という全国規模のイベントが同時期に開催されており、来場者に影響があると懸念されたが、結果的には約1,200名とほぼ前年並みの来場者となった。

企画は昨年と同様にタッチプール、調査船「弥生」の船内見学、海藻押し葉づくり、見学ツアー、講演会、ウミガメ見学などであったが各企画とも例年のごとく大盛況であった。



大好評の海藻押し葉づくり（大槌地区）

また、地元広報誌でセンターの特集記事が掲載されたことで来場した方も多く、地元で根強く浸透した研究所となったことが窺われた。

海洋研究所では、研究成果や海洋の知識を分かりやすく紹介し、研究所への理解を深めていただくために、今後も一般公開をさらに充実させて開催していくことになっている。

医科学研究所

東アジアシンポジウム 2008 に参加

部局

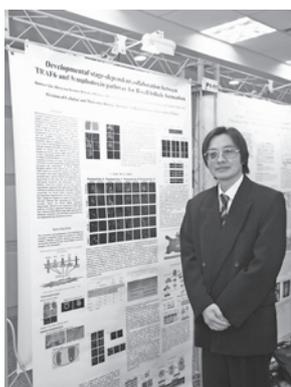
7月20日(日)～7月23日(水)の4日間、韓国成均館大学校医科大学三星生命科学研究所の主催でソウル市のSAMSUNG Medical CenterにてEast Asia Joint Conference(東アジアシンポジウム)2008が開催された。このシンポジウムはバイオメディカル分野におけるアジアの優秀な研究者間の交流を深めることを目的に14年前に始まり、参加機関が順番で主催している。本年は東大と成均館大の他に京都大学ウイルス研究所(IVR)、中国科学院上海生物化学細胞生物学研究所(IGCB)、国立台湾大学医学院生物化学分子生物学研究所(IBM)、ソウル大学分子生物学遺伝学研究所(IMBG)の計6機関が参加した。

各機関からはそれぞれ教員4名と大学院生またはポストドク5名が参加した。教員は20分間の研究発表と質疑応答、大学院生またはポストドクは5分間のポスター発表を行ったが、その内容はとてもハイレベルなもので、アジアがバイオメディカル分野の研究において世界をリードしていくであろうという見方を確固たるものにした。

また、例年「トミーデジタルバイオロジー株式会社」より寄附を頂いており、投票によって選ばれた優秀な発表者には賞品が贈られる。本年は中国科学院IGCB、京都大学、ソウル大学の学生が表彰された。シンポジウムは最終日のソウル市内観光をもって大成功のうちに幕を閉じた。来年は京都大学主催で開催される。



ソウル市内観光 一昌徳宮にてー



ポスターの前で(秦俊文さん)



集合写真 - SAMSUNG Medical Centerにてー

留学生センター

2008年度留学生センター日本語教育 集中コース・学術日本語コース(夏 学期)修了証書授与式が行われる

部局

留学生センターでは、7月31日(木)15時30分から、医学部教育研究棟13階第6セミナー室において、2008年度日本語教育集中コース・学術日本語コース(夏学期)の修了証書授与式が行われた。

このコースは、文部科学省から依頼された国費研究留学生を主たる対象としつつ、可能な限り一部他の留学生にも門戸を開いて日本語教育を行うコースであり、コース開設46期目にあたる今期の修了者は、68名であった。修了証書授与式には、坂野留学生センター長ほか、センター関係教員及び部局・研究科の国際交流室の先生方が出席され、センター長から修了者一人ひとりに修了証書が手渡され、その後、菊地教授(日本語教育部門主任教授)からクラス別の講評が述べられた。続いて、受講生から、コールドウェル・リース・アレクサンダー・オロクさん(ニュージーランド・初級代表)、アマニ・アブクデスさん(ヨルダン・中級代表)、インジェニエリ・イラーリアさん(イタリア・上級代表)の3名から日本語によるスピーチがあり、受講生の日本語の上達振りが披露され、楽しいスピーチと流暢な日本語を聞き、和やかな雰囲気の中、修了証書授与式が終了した。

引き続き、山上会館にところを移して、修了者を囲むでの懇談会が行われた。浅島理事・副学長には懇談会に出席していただき、修了者達と懇談され、ねぎらいの言葉をかけていただいた。また、修了者たちは、クラスごとに教員を囲んで記念撮影をし、互いに修了を祝福するなど、楽しいうちに閉会となった。

なお、今期の修了者68名の所属・出身は以下のとおり11研究科、36の国または地域である。

研究科

法学政治学研究科	2名
医学系研究科	2名
工学系研究科	26名
人文社会系研究科	3名

理学系研究科	1名
農学生命科学研究科	8名
総合文化研究科	5名
教育学研究科	3名
新領域創成科学研究科	2名
情報理工学研究科	10名
学際情報学府	6名

国または地域

・韓国	9名	・チェコ	1名
・タイ	8名	・エジプト	1名
・ブラジル	7名	・ガーナ	1名
・マレーシア	4名	・ハンガリー	1名
・インドネシア	3名	・インド	1名
・カナダ	2名	・イラン	1名
・フランス	2名	・イスラエル	1名
・イタリア	2名	・ヨルダン	1名
・フィリピン	2名	・メキシコ	1名
・ロシア	2名	・ニュージーランド	1名
・トルコ	2名	・パキスタン	1名
・アルジェリア	1名	・パナマ	1名
・オーストラリア	1名	・スペイン	1名
・オーストリア	1名	・スリランカ	1名
・バングラデシュ	1名	・シリア	1名
・ブルガリア	1名	・台湾	1名
・チリ	1名	・イギリス	1名
・中国	1名	・アメリカ	1名



懇談会



集合写真



学生スピーカー

産学連携研究推進部からのお知らせ

第3回ソフトウェア実用化提案会開催される



伊庭教授には、参加者から多くの質問が寄せられた。

7月10日(木)14時より、東京大学産学連携本部2F大会議室にて第3回UCRソフトウェア実用化提案会が開催されました。伊庭志教授(工学部電子情報工学科)より「遺伝的アルゴリズムの実世界応用と進化計算の新展開」をテーマに提案がありました。進化計算(EC)の代表的手法である遺伝的アルゴリズム(GA)と遺伝的プログラミング(GP)の原理についての説明後、金融、ロボット、バイオ情報処理、デザイン、音楽など様々な分野への応用が紹介され、そのデモンストレーションは参加者の注目を集めました。講演後は、産業界からの参加者(約50名)から多くの質問が飛び交い、関心の高さがうかがわれました。

新日鐵とのProprius21が共同研究へ

6月30日(月)15時より、新日本製鐵株式会社(以下、新日鐵)技術開発本部にて新日鐵と東京大学による、人と協調・協働するシステムの実現を目指した新たな共同研究テーマ「製鉄プロセスにおける知のマネジメントと価値創成」のキックオフとなる講演会が開催されました。本共同研究には本学から研究代表者並びに第二種研究領域リーダー上田完次教授(人工物工学研究センター)第一種研究領域リーダー大和裕幸教授(新領域創成科学研究科)、幹事奥田洋司教授(人工物工学研究センター)、青山和浩教授(工学系研究科)他総勢11名の研究者が参加します。研究期間は4年を計画しています。当日は新日鐵ステアリングメンバーも含め総勢30名超の規模で活発な講演・議論が行われました。



新日鐵・本学研究者による講演会の様子

(株)東京大学エッジキャピタル(UTECH)からのお知らせ

“UTECH EIR” 10月末まで2次募集受付

UTECHは、東京大学における研究の成果等を社会に還元する試みを一層促進させることを目的として、“UTECH EIR (Entrepreneurs In Residence)” というプログラムを実施しています。“UTECH EIR”は、東京大学の「知」を活用して1年以内の事業化に結びつける意欲と構想をお持ちの東京大学関係者の方を対象に、それぞれの構想の個別具体的な状況に応じてご支援させて頂く、起業支援プログラムです。最大1,000万円までの支援をさせて頂くのみならず、東京大学アントレプレナープラザを活用したインキュベーションスペースの提供や、事業計画立案に向けたアドバイスを含め、柔軟な支援・方策をご用意しています。

昨年度の募集から2件の支援を行っており、本年度の6月末までの募集からも1件(情報理工学系研究科修士課程の学生による、ウェブブラウジングにおけるカスタム注釈を提供するベンチャー企業popin(株)の起業支援)の支援を行っております。7月から10月末まで第2次募集を行っております。

“UTECH EIR” アントレプレナーセミナー開催

これまでに多数の応募がございました“UTECH EIR”を、より多くの東京大学の方に知って頂くことを目的として、6月12日(木)19時より、“UTECH EIR アントレプレナーセミナー@IT”を産学連携プラザにて開催致しました。東京大学大学院博士号取得後ITベンチャー企業を創業されました、(株)モルフォ平賀督基社長とプロメテック・ソフトウェア(株)藤澤智光社長のお二人をゲストスピーカーとしてお招き致しました。前半のセッションでは、創業や研究開発への参画に至るまでの道のりとベンチャーの醍醐味をゲストスピーカーの方よりご講演頂いた後に、UTECHの支援プログラムをご紹介致しました。

後半のセッションでは、懇親会を開催し、起業を主要トピックとしつつ、キャリア形成等、大学院生を中心とした起業に強い関心を持っている方が日頃問題意識を抱えている点についても活発に意見交換が行われました。



UTECH EIR アントレプレナーセミナー@ITの様子

連絡先:産学連携本部(本部産学連携グループ) 電話:内線22857
(外線03-5841-2857)ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR

検索

DUCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

INTERVIEW

東京大学総括プロジェクト機構 寄付研究部門
「水の知」(サントリー) 総括寄付講座
沖 大幹 教授 (生産技術研究所)

今回ご紹介するのは、2008年4月1日に発足し、7月4日(金)に設立記念シンポジウムを開催した、「水の知」(サントリー)総括寄付講座の沖大幹先生です。本寄付講座は、学、民という立場でそれぞれ水問題に取り組んできた東京大学とサントリーとが協働することにより、「水の知」を構造化して社会に発信し、水問題の解決と豊かな水環境の創成に資することを目的としています。

設立記念シンポジウムは平日の開催でしたが、安田講堂がほぼ満席となり、本学の教職員や学生に限らず、市民の方々にとっても、水問題が非常に関心の高い分野となっていることがわかりました。そんな「水の知」を率いる沖先生に、寄付講座の活動について伺いました。

Q.「水の知」とは？

沖 「水の知」は、構造化される水に関する様々な知識、といった意味です。それをなぜ「水の知識」や「水の知見」にしなかったかという、水の知...みずのち...みずのち...と繰り返していくと、「いのち」のように聞こえませんか？ このネーミングはそんな発想から、もともと、サントリーに寄付講座を作る提案をする際に企画書に記載していたものでしたが、広告面においても長けているサントリーにもご賛同いただけたことから、「水の知」(サントリー)総括寄付講座となりました。



Q.寄付講座発足の経緯は？

沖 本学では、「水」あるいは「水循環」に関する研究が工学、理学、農学、医学、法学、経済学といった様々な分野で行われています。同じようなテーマを全く異なる視点から研究しているため、お互いに情報交換し意見を聞くことは、今後の研究においても有意義であると思い、3年程前に「東大水フォーラム」という組織を結成し、定期的に合宿や勉強会を行ってきました。しかし、「東大水フォーラム」は有志による自発的な組織であったため、水関連の教員の研究をより強固にサポートする組織が必要だと考えていたところ、渉外本部から寄付講座を設置するご提案をいただきました。柏・本郷・駒場の三拠点で連携できる体制にして、今は「水の知」(サントリー)総括寄付講座が東大水フォーラムを支えています。

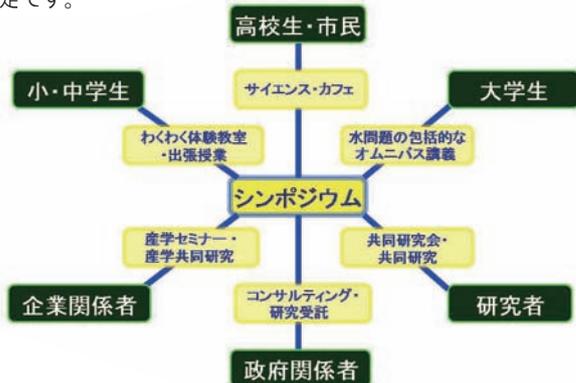
Q.本学とサントリーとの具体的な協働活動は？

沖 本寄付講座では、各分野の研究者が集まる週例会を実施しており、今後の方針等について話し合っています。寄付講座発足当時は、サントリーへ実際に赴き、全体の事業や水に対してどのような活動をしているかなどの説明を受けました。サントリーには水科学研究所という水専門の組織があり、水の特性、水と微生物、森林での水循環、環境学などの専門家が研究を行っています。そうした専門家の方々に、本学で開催している月例会に参加いただいて情報・意見交換を行っており、今後は共同で研究成果をあげていくことも視野に入れています。また社会に対する活動として、「水の日」の8月1日(金)には、お台場のサントリー本社において小学生を対象に「水育」

総長室総括委員会とは？

総長室の下に設置された、室、本部、機構といった組織をまとめる、本部における教授会のような役割を担っています。
総長室総括委員会HP: <http://cirp.u-tokyo.ac.jp>

イベントを行い、本学からも指導教員を派遣しました。社会に向け情報発信として、この他にも様々な活動(下記の図参照)を行っています。



Q.分野横断的な研究の難しさとは？

沖 分野横断的な研究は多視野にわたるため、内容自体は面白くなりますが、個人で研究成果を挙げることは非常に大変です。各分野の研究者が共同して研究を行いますので、まず「ことば」が違いますし、また相手にとってどのような研究に価値があり、どのような発見が面白いと感じるのかを理解することが大切です。さらに、文理融合だけではなく理理融合でも互いに価値観が皆違いますので刺激的ではあるのですが、理解しあうにはそれなりの努力が必要になります。

Q.今後の抱負は？

沖 本寄付講座では、「社会に開かれた講座」を目指しています。社会に開かれた講座とは、先端的な研究成果を学術論文にまとめることに加えて、その研究成果が社会や企業にとってどのような利益をもたらすか、あるいは市民にとってどういった面白さがあるのか、きちんと伝えていくことだと思います。大学の役割は色々あると思いますが、ひとつには普通の生活では思いつかない視点を提供することではないでしょうか。私たち大学の研究者は、利潤を求めず、ある特定の分野の研究だけを考え、仕事として学問に取り組めるありがたい立場にいます。普通に暮らしている中では思いつかないような視点で、自然を見たり、あるいは社会を見たりすることが出来る。私の専門の水文学(スイモンガク)の立場から言うと、自然・社会の両面から、水問題をどう捉えるべきか、あるいは温暖化問題をどう捉えるべきか、きちんと説明できたらと思います。そのため、外部からも活動が分かるように研究成果をしっかりあげて、社会に向けて情報発信をすることが重要だと考えています。また、学内においても「水の知」の認知度が上がり、「この分野ならば私も貢献できる」という研究協力者が増え、「水の知」のネットワークが広がっていかねばと期待しています。

(インタビュアー: 山縣、野村)

●関連ホームページ●

「水の知」(サントリー)総括寄付講座
<http://www.wow.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線20484)

「さすてなTimes」
第2弾!

サステナな日々

～キャンパスから考えるサステナビリティ～

vol. 9

感染対策の視点から見る、東大病院の取り組み

キャンパスのサステナビリティについて語る上で、私たちは大学の構成員やキャンパス内を歩き交う一般の方々の安全・安心、健康という視点は欠かせません。

6月に入って間もないある日、「サステナな日々」編集部は医学部附属病院の物流・環境チームの事務室を訪問させていただきました。そこで、病院独自で行っているさまざまな環境対策について伺いましたが、今回はそのうちの医療廃棄物管理とICTについてご紹介します。

★ 病院の廃棄物管理とICT

ICTとは感染制御チーム (Infection Control Team) のことです。このチームは、医師、看護師、コメディカル*、そして事務といった職種を横断したメンバーから成る、病院感染対策の実働部隊です。私たち物流・環境チームは、主に院内の環境管理の立場からICTのメンバーに加わっています。

ICTの活動は、病院感染サーベイランス (調査監視) をはじめ多岐にわたりますが、その中でも医療廃棄物の管理は大きな課題の1つです。

病院では、毎日多量の医療廃棄物が発生します。それらの「感染性廃棄物」と「非感染性廃棄物」への分別など、その適正な管理はまさに医療の現場から始まるため、この医療廃棄物管理の問題は、病院全体で取り組むことが必要です。よって、様々な職種から成るICTで検討・改善を進めていくことは、大変有用であると思います。

*コメディカル…医師と協同して医療を行う、検査技師・放射線技師・薬剤師・理学療法士・栄養士などの病院職員のこと。



● 職種を超えたチームで取り組む感染管理

★ 感染対策とリサイクルの視点で

実際に東大病院の医療廃棄物の管理について語るとき、ICTの存在は欠かせません。医療廃棄物の分別について、院内のルールづくりから周知・徹底までをICTが主体となって

サステナ (サステナビリティ; 持続可能性) とは?

環境の世紀と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要のキーワード。地球社会を持続可能なものへと導くビジョンを構築するための基礎となる新しい超学的な学術が「サステナビリティ学」(sustainability science)である。

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) HPより
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/top.html>

このコラムは、サステナビリティ学を個人のライフスタイルやキャンパスと結びつけることを目指しています。

進めています。また、廃棄物処理委託契約における仕様書の策定もICTメンバーが主体となって行っています。

このような病院感染対策の観点により、院外に排出された廃棄物についても注意を払うことは、結果として病院が「排出事業者責任」を果たすことにつながっています。排出事業者責任とは、産業廃棄物について、排出する事業者が自ら適正に処理しなければならないという責任のことです。

そして今、事業者が廃棄物管理について求められる課題にリサイクルへの取り組みがあります。東大病院では、近年、非感染性の医療廃棄物 (廃プラスチック等) のほぼ100%がリサイクル工場で「RPF」(写真) という固形燃料になって処理されています。このリサイクルの実現も、ICTメンバーによる仕様書の検討から実現しました。



● RPF
(Refuse Paper & Plastic Fuel)

感染性廃棄物の管理を進めることは、同時に非感染性廃棄物についても検討することになります。病院感染対策の取り組みがエコロジーにもつながった!と言えるのではないのでしょうか。

★ チームの持つ「動脈」と「静脈」の役割

～大きな銀杏の木の下で～

医療廃棄物のほとんどは、患者さまに使われた医療材料です。本院の医療材料は、基本的にSPD**という部署で中央管理し、医療現場に供給しています。私たち物流・環境チームの仕事には、このSPDや患者食供給業務も含まれていますが、これらを「動脈」とすれば、廃棄物処理や清掃業務の仕事は「静脈」と言えるかもしれません。

本院の将来計画において、院内の物流、特に「静脈物流」については、これまで十分に検討されてこなかったように思えます。患者さまの導線と物流の動線の区別、清潔と汚染のゾーニング (区分) といった問題について、現場で悪戦苦闘しているというのが実状です。また、近年我々に課せられる業務改善の課題は、「経営効率化」という概念に集約され過ぎてきているように思います。こうした状況の中でも、「静脈」から病院運営を見直すときが必要なのでは、と思っています。そのとき、ICTが果たす役割は小さくないと思うのです。

さて、「サステナな日々」編集部の皆さんがお見えになって以来、物流・環境チームでは「サステナ」が流行語となっています。病院の事務組織は、ここ数年で度々改組され、我々のチーム名もその都度変わってきています。「次の名前は『サステナ・チーム』だね!」と話してみる、最近の私たちはそんな「サステナな日々」を送っています。

** SPD…Supply Processing and Distributionの略。医療用器材等の供給部門を意味する。

医学部附属病院 管理課 物流・環境チーム
 成田 和彦

問い合わせ先: 本部研究機構等支援グループ (内線21387)



ギブスと日本海海戦

岡本 拓司
総合文化研究科 准教授
科学技術インタープリター養成プログラム担当

J. ウィラード・ギブス(1839-1903)は、大学の理科系に進んだ学生ならば、おそらく一度は名前を聞く機会をもつ科学者である。いずれも1・2年で学ぶ、熱力学・統計力学か物理化学の中に、ギブスの名前を冠した項目が現れる。ギブス自身が卒業し、教鞭をとったのはアメリカのイエール大学であるが、筆者は、同大学に東京大学が設けた日本研究の拠点に、昨年10月から今年4月まで滞在する機会を得た。この間の調査で、ギブスが意外なかたちで日本海海戦に関わっているのではないかと考えるようになった。

ギブスの指導下で博士号を取得した学生の中には日本人が一名いる。その名を木村駿吉(1866-1938)という。木村は、帝国大学の物理学科を卒業したのち、事情があってアメリカに飛び出し、1896年にイエールで学位を取得した。帰国後しばらくすると、兄のすすめで海軍に入ったが、そこでロシアとの戦争に備えた無線電信の開発を担当した。

無線の開発には、電気試験所の技術者の松代松之助や、海軍の外波内蔵吉も協力し、成果は三六式無線電信機として結実した。日本海海戦では、劈頭の「敵艦見ユ」の報以降、連合艦隊全体で盛んに無線での連絡が行われ、敵に見つかることを恐れて無線の使用を禁じていたロシアのバルト艦隊を圧倒した。

イエールで木村が取った講義のリストと、それらのノートを見るまでは、筆者は実は、無線電信の開発については、現実には技術者の松代の貢献が大きかったのではないかと考えていた。しかし、木村のとった講義の中に、ギブスの「光の電磁気学」と題するものがあり、それがギブス得意のベクトル解析で電磁波を扱ったものであるのを見て、考えを改めた。木村はギブスにより、当時世界の中でも講ずるものの少なかった、最先端の電磁気学のでほつきを受けており、この知識は無線電信開発に大いに役立ったものと思われる。

日本海海戦が闘われたのは1905年である。物理学史ではアインシュタインの特殊相対論の発表が思い浮かぶ。特殊相対論は、電磁気学の世界像による力学的世界像の超克を意味するといわれることがある。しかし、同じ時代の木村の例からは、同じ電磁気学であっても、状況に応じて様々な役割を演じていたことが分かる。1896年にイエールで光の電磁気学を講じていたギブスも、学んでいた木村も、これが十年後に日本を救う鍵の一つになるとは想像もしていなかったであろう。

★科学技術インタープリター養成プログラム
URL:<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>



ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信～ No.9



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



ケータイでお得なイベント情報をGET!

詳しくは utnav.jp にアクセス。

または mail@utnav.jp に空メール!

東京大学 教育企画室



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信!

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力!

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了!

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET!



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- <http://utnav.jp>にアクセス
- イベント掲載フォームから送信!
- 追ってスタッフよりご連絡致します教育企画室TREEオフィスまで!
- 内線; 27823 (重田)
- メール; info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス; 本郷キャンパス 第二本部棟401号室

コミュニケーションセンターだより No.50

■「観蓮会」結果報告

■今年も緑地植物実験所に出店しました！！

年に一度、この時期にある一大イベント「観蓮会」。千葉県検見川キャンパスにある緑地植物実験所で行われるイベントに、今年も出店しました。スタッフは早朝3時起きで準備というハードスケジュールでしたが、元気にスタートしました。

今年はとても天気が良く、蓮を観にいらっしやった方も5,000人を超える程の盛り上がりでした。



■一番の人気商品は、やはり「蓮香」！！



観蓮会へ初めて出店したころは、緑地植物実験所が東大の施設であることや、コミュニケーションセンターが出店している事をご存知でない方も多くいらっしゃいました。しかし今年は、4回目の出店であること、また昨年「蓮香」が販売開始になったこともあり、皆さんに立ち寄り下さいました。本当に今年は、例年とは比べものにならない程、コミュニケーションセンターをご存知の方が多く、賑わいました。

■観蓮会人気商品ランキング♪

- Ψ第1位Ψ 蓮香オードパルファム
- 第2位 蓮香あぶらとり紙
- 第3位 ポストカード(大賀蓮とその仲間たちセット)
- 第4位 御酒 陶器ポトル
- 第5位 光触媒シート



オードパルファム、あぶらとり紙など、蓮関連商品は大人気で、蓮のポストカードセットはなんと完売してしまいました。本郷のコミュニケーションセンターには、いつも蓮香のやさしい香りが漂っています。お店にも是非お立ち寄り下さい。

(担当：コミュニケーションセンター 山下)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30
電話：03-5841-1039
http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

わたしのオシゴト 第30回

Rings around the UT

史料編纂所史料保存技術室

村岡 ゆかりさん

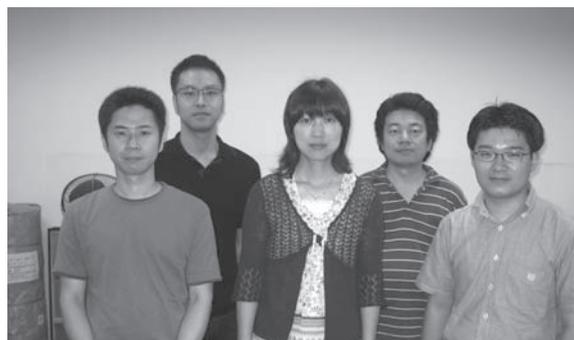
いにしへの絵師達に思いを馳せる日々

歴史の研究・編纂・出版などを主に行っている史料編纂所の中で、修復・影写・模写・写真の各分野がある史料保存技術室に所属し、模写を担当しています。模写は、奈良時代から江戸時代までの絵図・肖像画・屏風などの模写や原本が描かれた当時の状態に再現する仕事です。模写の作業は、使われた絵の具の材料の調査や、描写方法の調査などが前提として行われます。これらの原本精査の情報は重要なデータとなりますので、調査記録の作成も行っています。



絵図の模写を製作中

日本古来より使用されてきた絵の具は、とても美しい色をしています。昔の絵師達はこれらの絵の具に様々な工夫をこらし、どのように画面に映えるかを考慮して描いていたのだと思います。昔の絵画技術は秘伝とされていたため、絵師たちの意図を読み、材料をどのように使うか推理をしながら描いていくことは簡単なことではありません。一見地味で、肩のこりそうな仕事のように見えますが、私は子どもの頃から、推理小説やジグソーパズルが大好きだったため、謎を探り、パズルのピースを当てはめる感覚で、模写を行っています。休日はママさんバレーや少年野球に参加して、日ごろの肩こりの解消にも努めています。



史料保存技術室のスタッフです

得意ワザ：どんな場所・状況でも眠れること
自分の性格：子どものまま大人になった
次回執筆者のご指名：江川 豊さん
次回執筆者との関係：子どもが同じ少年野球チームに所属
一言紹介：厳しい監督さんです



教育学部附属中等教育学校の前期課程野球部が中野区夏季大会で優勝

6月28日(土)中野区哲学堂球場で行われた中野区中学校夏季大会で、教育学部附属中等教育学校の野球部が優勝した。

東大附属は、1回戦で北中野中を2対1で破り、2回戦で中野三中を7対0、準決勝で中野二中を5対4で破り、決勝に進出した。

決勝戦では、シード校の明大中野中を6対5で破り、優勝した。

最後は、逆転サヨナラ満塁ホームランで締めくくった。5対1で迎えた最終回、1アウト満塁、4番の仲一馬くんが、レフト方向に打ち、ランニングホームランとなった。

野球部の梅原章太郎監督(本校国語科教諭)は、「中野区の野球で本校が決勝に進出したのは私が平成2年に赴任してからは初めてで、もちろん優勝も初めてです。いま新宿区立四谷中で野球部の監督をしている本校OBが現役時代に『明大中野中に勝った』と言っていましたから優勝はそれ以来でしょう。春の都大会で優勝している明大中野を破って中野区から夏の都大会に出場できたということが快挙であり、生徒諸君は大いに誇りに思って下さい。」とコメントしてくれた。

附属学校は、都大会に出場して、1回戦武蔵村山中と対戦した。最終回一打同点のチャンスであったが、残念ながら結果は3対1で負けてしまった。

今後の野球部のさらなるの活躍を期待する。



優勝した野球部のメンバー

教育学部附属中等教育学校で「85km チャレンジウォーク」実施される

7月9日(水)～7月11日(金)まで、2年生富士五湖85kmチャレンジウォークが行われた。国際自然大学校のサポート(金井さん他7名)のもと、教員(7名)が引率した。仲間と協同して長距離を歩く経験をして、一体感と達成感を味わうのが目的である。

まず、山中湖の情報創造館で出発式が行われ、6名1班(男女3名ずつ)で、全20班が10時40分にスタートした。山中湖の湖畔を半周し、忍野を通り、25km歩いて1日目のゴール「富士吉田青少年センター」に、最終の班は、17時25分に到着した。そして、夕飯に牛丼を作って食べた。

2日目は、8時にスタートして、河口湖・西湖・精進湖、45km歩いて、ゴールの本栖湖スポーツセンターに、早い班は、16時30分に、最終の班は、19時25分に到着した。夜は、体育館で全体・係別・班別にそれぞれミーティングが行われた。各班ごとに反省会を行い、最終日の歩き方を確認した。

3日目は、8時にスタートして、東に富士山を眺めながら、最終ゴール(85km)である静岡県朝霧野外活動センターに、12時30分には全20班が到着した。ゴールでは、ボランティアの保護者の方々31名が、炊き出しでおにぎりや豚汁を作って、生徒たちを暖かく迎えてくれた。

3日間とも天候に恵まれ、気温も19度～23度で、歩くにはちょうど良かった。参加した生徒たちは、辛い経験を乗り越え、ひとまわり大きくなったようである。また、グループでお互いに励ましあい、助け合いながら3日間過ごし、最終日にはメンバーの絆が強くなったことが窺えた。



ゴールでの全体集合の様子

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

ナノバイオ・インテグレーション研究拠点 (CNBI)

CNSI-CNBI Symposium on Nanobiotechnology 2008

日時：9月8日(月)、9日(火)

9:30～18:10

会場：東京大学医学部教育研究棟 14階 鉄門記念講堂

主催：東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点

昨年11月、UCLAで、東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点(CNBI)とUniversity of California Los AngelesのCalifornia NanoSystems Institute(CNSI)が、両拠点の連携を密にすること、特にナノバイオ分野の研究成果創出を加速することを目指した、合同シンポジウムを開催し、大成功をもたらしました。今年、東京大学本郷キャンパスで、CNSI/CNBI合同シンポジウムが開催されます。CNBIはもとより、CNSIの世界第一線で活躍中の研究者による講演を予定しています。多くの皆様のご参加をお待ち申し上げます。

講演者

開会のあいさつ 平尾 公彦 東京大学 副学長

閉会のあいさつ 堀池 靖浩 独立行政法人物質・材料研究機構 フェロー

プレナリー講演

神原 秀記 日立製作所フェロー

藤嶋 昭 財団法人神奈川科学アカデミー 理事長

長田 義仁 独立行政法人 理化学研究所 特任顧問

岡野 光夫 先端医科学研究所 所長 / 女子医科学大学
大学院再生医工学分野

基調講演

Tim Deming CNSI, Prof. & Chair, Dept. of
Bioengineering / NanoBiotechnology and Biomaterials

Jim Gimzewski CNSI, Prof. Dept. of Chemistry &
Biochemistry

Omar Yaghi CNSI, Christopher S. Foote Chair,
Chemistry and Biochemistry

招待講演

Dolores Bozovid

C.J. Kim

Jeff Miller

Aydogan ozcan

Leonard Rome

Jacob Schmidt

Adam Z. Stieg

Fuyu Tamanoi

一木 隆範

片岡 一則

加藤 大

西山 伸宏

酒井 康行

坂田 利弥

佐藤 香枝

田畑 仁

高井 まどか

竹内 昌治

山崎 裕一

懇親会 山上会館 ラウンジ『ハーモニー』

費用 5000円(学生1000円)

お申し込みは、当拠点 Web からお願いいたします。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CNBI/index.html>

シンポジウム・講演会

生命科学研究ネットワーク

生命科学研究ネットワークシンポジウム2008 開催のお知らせ

東京大学生命科学研究ネットワーク(ネットワーク長: 山本理学系研究科長)では、「生命科学研究ネットワークシンポジウム2008 - 生命科学の広がりにむけて -」を次のとおり開催いたします。

日時：9月23日(火・祝)

10:00～17:00

場所：講演 安田講堂

ポスターセッション 安田講堂・工学部2号館

プログラム：

10:00～12:00 ポスターセッション(第1部)

13:00～13:05 挨拶

山本正幸 生命科学研究ネットワーク長(理学系研究科長)

13:05～13:20 総長挨拶

小宮山 宏 総長

13:20～13:50 講演1

理学系研究科 飯野 雄一 教授

「線虫C.エレガンスの化学走性行動と学習を制御する分子と神経回路」

13:50～14:20 講演2

新領域創成科学研究科 東原 和成 准教授

「フェロモンによる個体間コミュニケーション」

14:20～14:50 講演3

医学系研究科 河西 春郎 教授

「2光子励起顕微鏡で見る大脳の運動するシナプス」

14:50～14:55 挨拶

シンポジウム実行委員長 理学系研究科 神谷 律 教授

15:00～17:00 ポスターセッション(第2部)

17:15～19:00 懇親会(中央食堂)

今回のシンポジウムで、3回目の開催となります。盛況だった昨年に続き、今年もポスターセッションの場を設けました。午前、午後の部と、二部構成になっており、昨年より時間を長く設定しております。多数の参加者をお待ちしております。

生命科学研究ネットワークシンポジウム2008 ホームページ

<http://www.seimeikagaku.org/index.html>

生命科学研究ネットワークホームページ

<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/res/res5/kenkyu-nw-top.html>

東京大学 UNIVERSITY OF TOKYO
生命科学研究ネットワーク
シンポジウム2008

「生命科学の広がりむけて」

Biodiversity CELL
MOLECULE DNA Ecosystem

■日程
平成20年9月23日(火・祝) 10:00～17:00

■会場
講義棟 東京大学 安田講堂
ポスターセッション 東京大学 安田講堂(工学部2号館)

■主催
東京大学生命科学研究ネットワーク
東京大学生命科学研究ネットワークシンポジウム実行委員会
<http://www.adm.u-tokyo.ac.jp/res/res5/kenkyu-nw-top.html>

■協賛
東京大学 理学系研究科

■プログラム
13:00～13:05 生命科学研究ネットワーク開会式
13:06～13:20 総長挨拶(小宮山 宏 総長)
13:20～13:50 講演1 線虫C.エレガンスの化学走性行動と学習を制御する分子と神経回路(飯野 雄一 教授)
13:50～14:20 講演2 フェロモンによる個体間コミュニケーション(東原 和成 准教授)
14:20～14:50 講演3 2光子励起顕微鏡で見る大脳の運動するシナプス(河西 春郎 教授)

■ポスターセッション
7月11日(金)～11月1日(金)
7月11日(金)受付開始
(申込と受付開始は同日です。)

http://www.seimeikagaku.org

理学系研究科 生命科学研究科 分子生物学研究室
TEL 03-5541-4422 FAX 03-5541-4522
E-mail: seimeikagaku@seimeikagaku.org

生命科学研究ネットワークシンポジウム2008 ポスター



前回シンポジウムのポスターセッション(工学部2号館)

シンポジウム・講演会

大学院教育学研究科・教育学部

大学院教育学研究科・臨床心理学コース主催
国際シンポジウム「子どもの心のケアの現場
で役立つ心理専門職とは」
—チーム支援における臨床心理士の役割—

子どもの心のケアにおいては、病理的基準だけではなく、発達の視点に基づいて問題を扱うことが重要です。また、子どもの気持ちを尊重することに加えて、親を中心とする家族や学校など、本人を取り囲む環境と密接に関わりながらケアを行うこと、そのようなケアを提供できる社会システムを構成することも必要です。そこで、臨床心理学コースでは、日本臨床心理士会の後援を受け、チーム支援が発展している英国の活動を参考に、日本の子どもの心のケアの現場に適した心理職の専門活動を検討するシンポジウムを開催いたします。臨床心理士はもちろん、医療・福祉・教育関係の方はぜひご参加ください。

【主催】 大学院教育学研究科臨床心理学コース
【日時】 10月12日(日) 13:00～18:30
【場所】 安田講堂(同時通訳付)
【研修ポイント】 臨床心理士資格更新のための2ポイント(認定協会研修)
【参加費】 2000円(学生1500円)
【定員】 1000名
【プログラム(概略)】

第I部 招待講演 子どもの心のケアにおける心理専門職の役割

1. The Roles and Functions of Clinical Psychologists with Children and Young People: the UK experience (子どもと若者に関わる臨床心理士の役割と機能: 英国の経験から)

講演者 Paul Stallard

バース大学 児童と家庭のメンタルヘルス部門教授

2. 日本における子どもの心のケアの課題と心理専門職の役割-統合的サポートの発展に向けて-

講演者 村瀬嘉代子 日本臨床心理士会長

第II部 話題提供 子どもの心のケアに関わる心理専門職への要望

1) 児童精神科の立場から:

金生由紀子 医学部附属病院 こころの発達診療部 特任准教授

2) 児童福祉の立場から:

伊達直利 旭児童ホーム 施設長

3) 家族の立場から:

山岡 修 日本発達障害ネットワーク 副代表

4) 行政の立場から: 厚生労働省関係者

第III部 討論 今後の発展に向けて

招待講演者2名+話題提供者4名

【申込】 <http://www.p.u-tokyo.ac.jp/shimoyama/>

お知らせ

お知らせ

本部入試グループ

各種選抜要項・募集要項等の配付のお知らせ

「平成21年度入学者選抜要項」及び「大学案内2009」の配付始まる

「平成21年度東京大学入学者選抜要項」が決定し、各都道府県教育委員会等に通知するとともに7月25日(金)から、本郷キャンパス〔正門, 赤門, 広報センター(龍岡門), コミュニケーションセンター(赤門脇), 東大生協(安田講堂売店, 書籍部), 農学部正門〕、駒場Iキャンパス(正門, コミュニケーションプラザ北館1階生協購売部)で配付を開始した。また、「大学案内」についても、2009年度版の配付を同様に開始した。なお、本学ホームページ、テレメールからも請求することができる。平成21年度入学者選抜の実施教科・科目等は表1・2・3のとおりである。

「平成21年度外国学校卒業学生募集要項」の配付始まる

「平成21年度東京大学外国学校卒業学生募集要項」が決定し、7月1日(火)から入学志願者に対し、本郷キャンパス〔正門, 赤門, 広報センター(龍岡門)〕、駒場Iキャンパス(正門)で配付を開始した。また、本学ホームページ、テレメールからも請求することができる。なお、平成21年度の募集人員、出願資格、選抜方法等、出願期間、選抜期日など、特別選考の概要は表4のとおりである。

表1 平成21年度 東京大学入学者選抜前日期試験等の実施教科・科目等について（文科各類）

学部・学科等名 及び募集人員等 (平成20年度 志願倍率)	学力検査等の 区分・日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名			個別学力検査等(第2次学力試験)			大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等					特別の選 抜方法等	その他		
		教科	科目名等	注1	教科等	科目名等	注2	試験の区分	国語	地歴	公民	数学			理科	外国語
文科一類 3.4 401人 前 期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・教II・教A・数B 日B,世B,地理Bから2 英(英I・英II・リーディング),独, 仏,中から1	センター試験	200	100	100	200	100	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格	
文科二類 3.7 353人 前 期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・教II・教A・数B 日B,世B,地理Bから2 英(英I・英II・リーディング),独, 仏,中から1	センター試験	200	100	100	200	100	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格	
文科三類 3.6 469人 前 期 その他 若干	2月25・ 26日	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	国語 世A,世B,日A,日B,地理A,地理Bから1 地理A,倫,政経から1 公民 数 教I・教A 教II・教B,工,簿・会,情報から1 物I,化I,生I,地学Iから1 英,独,仏,中,韓から1	[6教科7科目]	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・教II・教A・数B 日B,世B,地理Bから2 英(英I・英II・リーディング),独, 仏,中から1	センター試験	200	100	100	200	100	200	200	900	帰国子女 外国人 追加合格	

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

(1) 工業数理基礎,簿記,会計,情報開発基礎を選択できる者は,高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了(見込み)者だけである。
(2) 英語のリスニングテストの成績については,利用しない。

注2【個別学力検査等】欄

(1) 数学Bの出題範囲は次のとおりである。
数学B(「数列」,「ベクトル」)
(2) 英語試験の一部分に置き取り試験を行う。(30分程度)

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

学力試験の成績の判定は,大学入試センター試験の成績(総得点900点を110点に換算)と個別学力検査の成績(総得点440点)とを総合(550点満点)して行う。この比率は,大学入試センター試験の成績を「1」,個別学力検査の成績を「4」とする。

表3 平成21年度 東京大学入学選抜後期日程試験の実施教科・科目等について〔全科類（理科三類を除く）〕

学部・学科等名 (平成20年度 志願倍率)	学力検 査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名		注1		注2		大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等					注3	特別の選 抜方法等	その他		
		教科	科目名	教科・科目等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語				総合科目Ⅰ	総合科目Ⅱ
全科類 (理科三類を除く) 34.85	3月13日	国語 世A, 世B, 日A, 日B, 地理A, 地理B, 環境, 倫, 政経	国語 世A, 世B, 日A, 日B, 地理A, 地理B, 環境, 倫, 政経	総合科目Ⅰ 総合科目Ⅱ 総合科目Ⅲ	約5.0倍	センター試験	200	*100	200	100	200				800	追加合格	
100人		公民 教 理 外	公民 教 理 外			個別学力検査					100	100	100	300			

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 工業数理基礎、簿記・会計、情報関係基礎を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了（見込み）者だけである。
 (2) 英語についてはリスニングテストの成績を含む（筆記200点、リスニング50点の合計250点を200点に換算する）。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 総合科目Ⅰは、英語の読解力と記述力を見る（英語読解・記述を通して、表現力、構成力などを審査する）。
 (2) 総合科目Ⅱは、事象の解折への数学の応用力を見る（自然や社会のさまざまな事象を数学的に解折することを問う。ここで用いられる数学の知識は高等学校又は中等教育学校における数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B（教列、ベクトル）・数学C（行列とその応用、式と曲線）にわたるが、この科目では数学の総合的な応用力を審査する）。
 (3) 総合科目Ⅲは、文化、社会、科学等に関する問題について論述させ、理解力・思考力・表現力を見る。

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

- (1) 合格者の判定は、個別学力検査の結果に基づいて行う。ただし、判定に必要な場合は、大学入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。
 (2) *印を付してある教科は、複数の科目を受験した場合に高得点の科目の成績を合否判定に利用することを表す。

表4 平成 21(2009) 年度 外国学校卒業学生特別選考

東京大学

実施科類	文科一類, 文科二類, 文科三類 理科一類, 理科二類, 理科三類
募集人員	文科一類, 文科二類, 文科三類 理科一類, 理科二類, 理科三類 } 第1種, 第2種 各若干名
出願資格	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者) 平成16(2004)年4月1日から平成21(2009)年3月31日までの間に, 次の基礎資格を取得し, かつ, 要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア, イいずれかに該当すること。 ア 外国において, 我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者, 又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において, 我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは, 地理的, 場所的に外国で, 原則として, その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって, 修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については, 本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので, 早めに照会すること。 イ 文部科学大臣の指定した者 ○ 外国において, スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格を有する者で18歳に達したもの ○ 外国において, ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を有する者で18歳に達したもの ○ 外国において, フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を有する者で18歳に達したもの</p> <p>(2) 要件 次に掲げるすべての要件を満たすこと。 ア 独立行政法人日本学生支援機構が実施する日本留学試験 (平成20(2008)年6月, 11月実施のいずれか) の所定の科目をすべて受験すること (日本語・英語いずれの出題言語でも受験可)。所定の科目とは, 文科各類を志望する者は文科系の科目である「日本語」・「総合科目」・「数学 (コース1)」, 理科各類を志望する者は理科系の科目である「日本語」・「理科 (物理・化学・生物から2科目選択)」・「数学 (コース2)」のことである。 注) 数学のコース選択を注意すること。コースの選択を間違えた者は, 第1次選考不合格者とみなすので注意すること。 イ TOEFL (Test of English as a Foreign Language) を受験すること (PBT, CBT, iBTいずれでも可)。なお, 出願期間までにOfficial Score Report又はExaminee's Score Recordが提出できれば, 受験時期は問わない。 ウ 外国の学校に, 原則として, 最終学年を含め継続して1年以上在学し, その最終学校を修了すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人) 平成19(2007)年4月1日から平成21(2009)年3月31日までの間に, 次の基礎資格を取得し, かつ, 要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア, イいずれかに該当すること。 ア 外国において, 我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者, 又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において, 我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは, 地理的, 場所的に外国で, 原則として, その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって, 修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については, 本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので, 早めに照会すること。 なお, 文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設出身者は出願が認められない。 イ 文部科学大臣の指定した者 ○ 外国において, スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格を有する者で18歳に達したもの ○ 外国において, ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格を有する者で18歳に達したもの ○ 外国において, フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格を有する者で18歳に達したもの</p> <p>(2) 要件 次のア, イいずれかの要件を満たすこと。 ア 外国の学校に最終学年を含め継続して3年以上在学し, その最終学校を修了すること。ただし, 最終学年の休業等によって書類上の在学期間が3年未満となる場合については, 12月下旬に行う出願資格審査において, 3年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。</p>

出願資格	イ 外国の学校に最終学年を含め最終学年からさかのぼって連続する6年間のうち通算で5年以上在学し、その最終学校を修了すること。 ただし、休業等によって書類上の在学期間が5年未満となる場合については、12月下旬に行う出願資格審査において、5年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。
選抜方法等	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者)</p> <p>(1) 第1次選考 書類選考, 日本留学試験及びTOEFL (Test of English as a Foreign Language) の成績</p> <p>(2) 第2次選考 小論文, 面接 なお、小論文については次のとおりである。</p> <p>[小論文] 2問を課す。 2問とも日本語で解答すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人)</p> <p>(1) 第1次選考 書類選考</p> <p>(2) 第2次選考 小論文, 学力試験, 面接 なお、小論文及び学力試験の出題教科・科目については次のとおりである。</p> <p>[小論文] 2問を課す。 第1問は日本語で解答し、第2問は次の言語のうちからあらかじめ出願の際に届け出たもので解答すること。英語, ドイツ語, フランス語, 中国語, ロシア語, スペイン語, イタリア語, 韓国朝鮮語, アラビア語</p> <p>[学力試験]</p> <p>(文科各類)</p> <p>外国語 英語 (英 I, 英 II, リーディング), ドイツ語, フランス語, 中国語から1外国語 ただし、問題の一部分は、届け出た外国語に代えて、英語, ドイツ語, フランス語, 中国語, ロシア語, スペイン語, 韓国朝鮮語のうちから一つを試験場において選択することができる。 ※英語試験の一部分に聞き取り試験を行う。(30分程度)</p> <p>(理科各類)</p> <p>数学 数 I, 数 II, 数 III, 数 A, 数 B (数列, ベクトル), 数 C (行列とその応用, 式と曲線)</p> <p>理科 物 I・物 II, 化 I・化 II, 生 I・生 II, 地学 I・地学 II から2科目</p>
出願期間	第1種 平成20(2008)年12月1日(月)から12月8日(月)まで 第2種 平成20(2008)年11月4日(火)から11月11日(火)まで
選抜期日	第1種 平成21(2009)年2月25日(水), 3月17日(火) 第2種 平成21(2009)年2月25日(水)・26日(木), 3月17日(火)
合格発表日	平成21(2009)年3月22日(日)
その他	「平成21(2009)年度外国学校卒業学生募集要項」は、交付中である。 交付場所は本郷キャンパス正門・赤門・広報センター(龍岡門), 駒場 I キャンパス正門である。

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス”「文献検索早わかりコース」実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

9月は、「文献検索早わかりコース」と題して、図書や電子ジャーナル、雑誌論文、新聞記事の検索方法を60分でコンパクトに解説するコースを開催します。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

- 日程： 同内容で2回開催します。
 - ・第1回： 9月17日（水）15:00～16:00
 - ・第2回： 9月26日（金）13:30～14:30

- 会場： 本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー（定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。）

- 内容：
 - ・図書の所在を探す（東京大学OPAC）
 - ・電子ジャーナルを探す（E-JOURNAL PORTAL他）
 - ・あるテーマに関する雑誌論文を探す（CiNii、Web of Science）
 - ・新聞記事を探す（朝日新聞「聞蔵II ビジュアル」他）

- 参加費： 無料

英語によるガイダンスは、以下のとおり Web of Science コースを実施します。

< Database User Training (English Session) >

■ Web of Science Course (60 minutes)

9/30 (Tue.) 15:00-16:00

Covers articles published in major academic journals (about 9,300 journals).

In addition to conventional searches by keyword, it provides information on citation inter-connections.

No advance reservation is required.

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

- 問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649（内線：22649）

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

IAESTE 国際インターンシップ説明会 開催のお知らせ

IAESTE 東京支部（東京大学 IAESTE 委員会）では、下記により国際インターンシップの説明会を開催いたします。IAESTE（イアエステ）は、理工農薬学系学生に海外の企業や大学等での国際インターンシップを仲介している国際非政治団体です。1948年にヨーロッパで発足し、現在80カ国余りの国々がIAESTEに加盟しています。ユネスコ等を諮問団体として、全世界4,000社に及ぶ企業・大学の後援を軸に、これまでに延べ30万人近い学生へ国際インターンシップの場を提供してきました。IAESTE研修は、専門分野における広い視野や国際感覚を始め、他では得ることのできない貴重な経験を与えてくれるはずです。IAESTE理事校の一つである本学では、毎年多くの学生がIAESTE国際インターンシップに参加し、活発な国際交流が行われています。

現在、IAESTEは2009年度IAESTE国際インターンシップ参加者を募集しています。留学生・研究生も参加可能です。国際インターンシップに興味がある理系学生の方は、是非お気軽に足をお運びください。



ドイツ IAESTE インターンシップ参加者（昨年度）

< 第1回説明会 >

日時：9月20日（土）14:00～16:00

場所：早稲田大学 大久保キャンパス 53号館 202教室

< 第2回説明会 >

日時：10月11日（土）14:00～16:00

場所：東京大学 本郷キャンパス 工学部1号館1階14講義室

内容：

- | | |
|---------------------|-------------|
| ① IAESTE 説明 | 14:00～14:15 |
| ② 派遣生 OB・OG による研修報告 | 14:15～15:00 |
| ③ 来日中の研修生による現状報告 | 15:15～15:30 |
| ④ 個別相談会 | 15:30～16:00 |

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

第115回教養学部オルガン演奏会 初期イタリアのオルガンとアンサンブルの音楽

駒場キャンパス恒例のオルガン演奏会、今回は国際的オルガニスト、バッハ・コレギウム・ジャパン主宰者としても高名な鈴木雅明氏をお迎えします。声楽、アンサンブルとの共演もたのしみなプログラムです。

日時 10月3日(金) 18時30分(開場18時)
場所 教養学部900番教室(講堂)
入場 無料(先着500名)

クラウディオ・モンテヴェルディ
「ああ、ぼくの恋人はどこだ」
(マドリガーレ集第7巻より)
タルキエーニオ・メールラ 「恋のリラにのせて」
ジローラモ・フレスコバルディ
「トッカータ・プリマ(トッカータ第2巻より)」ほか

出演
ソプラノ:野々下由香里 クリステン・ウィットマー
リコーダー:森吉京子
ガンバ:福澤 宏
リュート:佐藤亜紀子
オルガン:鈴木雅明
(主催:大学院総合文化研究科・教養学部オルガン委員会)

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部選抜学生コンサート・オーディションのお知らせ

駒場コミュニケーション・プラザ北館2階の音楽実習室には、スタインウェイのグランドピアノがあります。このピアノは学生の皆さんのために使うことを目的に購入されたものです。

ピアノ委員会では、毎年2回教養学部選抜学生コンサートを開催していますが、次回は11月15日(土)ホームカミング日当日です。それに先立ち、以下の要領でオーディションを行います。ふるってご参加ください。

日時:10月7日(火) 18時から
場所:駒場キャンパス 101号館1階音楽室
応募資格:在籍中の学部生・大学院生(個人でもアンサンブルでも可)
申し込み締切:9月24日(水)
申し込み方法等詳細と申込書ダウンロード:
<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/pfkomaba/audition.html>
駒場美術博物館事務室(電話5454-6139 月~金10時~18時。祝日、休日を除く)

事務連絡

人事異動(教員)

発令日、部局、職、氏名(五十音)順

	氏名	異動内容	旧(現)職等
(退職)			
20.7.31	野原 実	辞職(岡山大学大学院自然科学研究科教授)	大学院新領域創成科学研究科准教授
20.7.31	澤 昭裕	辞職(経済産業省事務官)	先端科学技術研究センター教授
20.7.31	井野 秀一	辞職(独立行政法人産業技術総合研究所主任研究員)	先端科学技術研究センター准教授
(採用)			
20.8.1	高木 健	大学院新領域創成科学研究科教授	大阪大学大学院工学研究科准教授
20.8.1	ROGER DALE SMITH	東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター准教授	大学院経済学研究科特任講師
20.8.1	松田 康弘	物性研究所附属国際超強磁場科学研究施設准教授	東北大学金属材料研究所准教授
(昇任)			
20.7.16	大杉 美穂	医科学研究所准教授	医科学研究所助教
20.8.1	黄 弘	生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センター准教授	生産技術研究所附属計測技術開発センター助教
(配置換)			
20.8.1	森田 一樹	生産技術研究所附属サステイナブル材料国際研究センター教授	生産技術研究所教授
20.8.1	山本 良一	生産技術研究所教授	生産技術研究所附属サステイナブル材料国際研究センター教授

* 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

竹中規雄名誉教授

竹中規雄名誉教授は、2008年7月1日（火）ご逝去されました。

先生は、大正3年東京都に生まれ、昭和11年3月東京帝国大学工学部機械工学科を卒業後、直ちに鉄道省に入省され、工作局、東京鉄道局、名古屋鉄道局に勤務の後、昭和12年1月召集を受け昭和15年12月召集解除となるまで軍務に服しました。引き続き東京鉄道局に勤務の後、昭和16年12月に鉄道省を退職し、東京帝国大学助教授に任ぜられ、第二工学部に勤務し、機械工学第二講座分担を命ぜられました。昭和26年3月東京大学教授に昇進されました。昭和37年11月工学部教授に併任となり、産業機械工学第一講座を担当し、爾来昭和49年に停年退官されるまで32年間の長期にわたり研究および教育に尽力され、昭和49年5月東京大学名誉教授の称号を授与されました。なお、その間東京工業大学併任助教授としても教育に携わり、



東京大学停年後は日本大学で教授として昭和59年3月まで勤務されました。

研究では切削工学の振興に努められ、切削現象、仕上げ面品質などの数多くの研究を通じて、切削加工分野の発展に指導力を発揮されました。また、日本機械学会の理事、副会長および会長、日本工学会副会長、精機学会（現精密工学会）理事、潤滑学会理事等を努められ、学会の発展に寄与されました。その他、日本工業標準調査会委員、文部省学術審議会専門委員、学術奨励審議会委員、工業技術協議会臨時委員、航空技術審議会専門委員、郵政審議会専門委員等としても活躍され、社会の発展に寄与されました。

このように、先生は東京大学教授、日本大学教授として長年にわたり優れた人格と卓越した識見により多くの技術者、研究者を育成し、我が国の機械工業の発展、とくに切削加工学および工業の進歩に多大な貢献をされました。これらの功績をたたえ、昭和53年には藍綬褒章を、昭和62年には勲三等旭日中綬章を受章されました。先生の面影を偲びつつ、ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院工学系研究科）

Contents

特集

- 02 高校生のためのオープンキャンパス 2008 開催
06 東京大学の国際化に関する意見と要望調査

NEWS

一般ニュース

- 14 フンボルト賞受賞
14 埋蔵文化財調査室
追分新国際宿舎（仮称）建設予定地の発掘調査報告
15 本部学生支援グループ
調理者研修会を開催
16 本部環境安全グループ
「安全シンポジウム」、開催される
16 本部留学生支援グループ
平成 20 年度第 1 回「外国人留学生支援基金奨学生
証書授与式」開催される
17 海洋アライアンス
海洋アライアンス・シンポジウム
「海と人類との新たな接点」開催される
17 学生相談ネットワーク本部
教職員のための「コミュニケーションスキルアップ」
講習会
18 本部環境安全グループ
総長による「安全パトロール」、実施される

部局ニュース

- 19 物性研究所
「フライホイール発電機」運転開始式典が開催される
19 史料編纂所
日露関係史料をめぐる国際研究集会在開催される
20 宇宙線研究所
IC カードを用いた安全管理システムを導入
21 大学院教育学研究科・教育学部
附属中等教育学校で第 2 回「学びの共同体」研究会、
行われる
21 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生・外国人研究員等との懇親会開催される
22 大学院総合文化研究科・教養学部
三鷹国際学生宿舎で帰国留学生への歓送会行われる
22 分子細胞生物学研究所
分子細胞生物学研究所で留学生と教職員との懇談会
を開催
23 海洋研究所
恒例の一般公開を開催
24 医科学研究所
東アジアシンポジウム 2008 に参加
24 留学生センター
2008 年度留学生センター日本語教育集中コース・
学術日本語コース（夏学期）修了証書授与式が行わ
れる

◆ 表紙写真 ◆

安田講堂を眺める
オープンキャンパス
参加者たち
(2 ページに関連記事)

コラム

- 26 Crossroad 産学連携本部だより vol.33
27 発掘！総長室総括委員会（第 7 回）
28 サステナな日々 vol.9
29 インタープリターズ・バイブル vol.15
29 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 No.9～
30 コミュニケーションセンターだより No.50
30 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第 30 回
31 噴水 教育学部附属中等教育学校の前期課程野球部
が中野区夏季大会で優勝
31 噴水 教育学部附属中等教育学校で「85km チャレ
ンジウォーク」実施される

INFORMATION

シンポ・講演会

- 32 ナノバイオ・インテグレーション研究拠点（CNBI）
CNSI-CNBI Symposium on Nanobiotechnology
2008
32 生命科学ネットワーク
生命科学ネットワークシンポジウム 2008 開催
のお知らせ
33 大学院教育学研究科・教育学部
大学院教育学研究科・臨床心理学コース主催国際シ
ンポジウム
「子どもの心のケアの現場で役立つ心理専門職とは」
—チーム支援における臨床心理士の役割—

お知らせ

- 34 本部入試グループ
各種選抜要項・募集要項等の配付のお知らせ
40 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス”「文献検索早わかりコース」
実施のお知らせ
40 大学院工学系研究科・工学部
IAESTE 国際インターンシップ説明会 開催のお知
らせ
41 大学院総合文化研究科・教養学部
第 115 回教養学部オルガン演奏会
初期イタリアのオルガンとアンサンブルの音楽
41 大学院総合文化研究科・教養学部
教養学部選抜学生コンサート・オーディションのお
知らせ

事務連絡

- 41 人事異動（教員）

訃報

- 42 竹中規雄名誉教授

淡青評論

- 44 市場原理主義と大学

編集後記

今号が配付される頃には、酷暑も和らぎ、少し過ぎやすくなっている
でしょうか。今年の夏は雷雨が多いと言いますが、まさに今日も、
私のデスクからは鮮やかな(?)稲妻が見えています。きっと帰りは、
雨も雷もすっかり落ち着いた頃になるので、傘はいらないだろうと思
う校了日です。(た)



七徳堂鬼瓦

市場原理主義と大学

昨今、組織的倫理違反・ワーキングプア・財政破綻・地球温暖化等、社会・経済・産業面で深刻な問題が次々と顕著になってきている。その理由の一つは、バブル崩壊後急速に普及拡大してきた市場原理主義ではないかと考えられる。市場原理主義によれば、自由主義を前提とし、物事を市場に委ねることによって、公平さや繁栄が達成され、ひいては人類の幸福に結び付く。しかし、現実には、規制緩和・効率性重視が進み、構造改革・成果主義・金銭至上主義・組織のリストラ・正社員の減少（フリータやニートの増加）・弱肉強食等の傾向が強くなり、その結果冒頭に述べたような深刻な問題が増大してきたと考えられる。

このような市場原理主義が大学においても着実に浸透しつつあるように感じる。例えば、国立大学の法人化・大学の評価・総長（学長）等トップの権限強化・組織改正・交付金配布方針等にその流れが見受けられる。しかしながら、上述の通り、度が過ぎて逆効果を招く恐れが多分にある。大学は自治を特徴とする組織であり、英知を集めて、そのような問題が生じないよう、あるいは生じてしまった問題を適切に解決する独自策を見出すことが求められているのではないだろうか。一例として、評価について言えば、法人・部局等の組織を単位とした評価に加え、今後は個人評価とその結果に基づく人事施策が展開されていくものと予想される。本学でも、既に職員を対象とした評価が始まっており、教員の個人評価についても今後議論が進むであろう。類似例としては、古くから実施されている企業の研究者等の評価があり、その方法はある程度参考になると期待されるが、企業目的には縁が薄い学問を目的とし個々の自主性を特に重んじる大学教員の評価にはやはり新しい解決策が必要であろう。本学に期待される役割の一つが、市場原理主義に由来する問題を解決可能な新しいパラダイムを率先して創造し実践に移していくことにあるのではないかと感じる今日この頃である。

若原 恭（情報基盤センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No. 1376 2008年8月21日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報グループ
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>